

# 鬼畜米英に載る母子像

小宮山 昭

## 若い人たちに

僕は、我が事務所の所員、学生達、若い世代とそれなりに交わつて来ました。経験を一つだけ、非常勤ながら何故か某大学の卒業式後の謝恩会に呼ばれ、壇上に立ちました。米英によるイラク侵攻爆撃開始の直後でした。米英の侵略行為を糾弾しました。場違いのため座は白けました。宴の後、シンパシーを示してくれたのは、助手達とボスドク、僅かな学生でした。

勝手な推断です。安定した地位の専任教員、大中企業に就職する学生達、耳を傾けながらもここでそんな話をしなくてものと口が虚ろでした。現状の生活に不安や不満を持つ者が世の動向に対する異議に共感する。世の常だと思いました。

どうやら生活を満たしかりにも熱意をもつて仕事している若い人達に戦争の実記憶のない僕がその悲惨さを訴えても説得力はします。

ヴェトナム戦争さえ四〇年前のこととなりました。北区にあつた米軍野戦病院に米軍の傷病兵が運び込まれ、沖縄や九州から米軍機が直接ヴェトナムに出撃して日本も直接間接的に参戦状態だったあの頃の反戦デモには若いエネルギーが溢れてました。僕も若かった。

どうもいつもの調子になってしまいますが若い人達を揺るがすためにこんな言い方をします。

安倍は東アジアに緊張が高まっていると枕詞のように繰り返している。

中国とアメリカも加わった全面戦争、北朝鮮が日本を攻撃するなんてことあり得ますか？ 尖閣辺りで小競り合いはあるかもしれない。本格的戦争になることを回避する方法は外交的にいくらでもあるはず。アメリカの世界戦略に乗つて集団的自衛権とか訳の解らぬこと言つて自衛と称する戦争に巻き込まれることの方がはあるかにあり得る。

戦争準備をする以前に、人口問題、食料問題、エネルギー、環境問題危機はそこら中にあつて若い貴方方を脅かすかもしれない。そんな時も自分たちだけは今の生活を維持出来る側に居場所を確保するために今の中から準備をしておこう。姑息で身勝手に過ぎない？ それもうまく行く保証なんてない。

逃げ場のない問題ばかりなのだから。安倍のすべての政策は、自分と周りの集団の利益保全と安全？ を求めて国民大衆を置去りにした一種の逃走のように僕には思える。新聞でも何でも少し眞面目な書き物を読んでみたら。そうすれば僕が一人よがりのこと言つているんじやないことがわかるはずだよ。

## 美大生の創った母子像

ついでに個人的なことを一つ。

僕が大事にしている高さ五〇センチ程の母子像があります。防空頭巾を被つた母親、抱かれて片手を天に伸ばしている赤子は僕自身です。  
育つた家の三軒先に石井鶴三という彫刻家のアトリエ・住居がありました。画家石井柏亭の弟で芸大教授でもあつた具象彫刻の大家です。

ある時、鶴三の書生をしていた美大生が、突然我が家を訪れて母に手渡して行つたのがその母子像です。母とは道ですれ違つて会釈をする程度の間柄でした。

母は若いときは姿の良い人でした。若い美大生は感じるところあって石膏の母子像を製作したのだと思します。

僕は疎開児ですから疎開前の一歳そこそこの赤子だったのでしょうか。この彫刻の問題は母子像の下に、角を生やした西洋人風の鬼がドルと書かれた麻袋を抱え込んでうずくまつていることです。うずくまつた鬼畜米英の腰の上に母子像が立つてゐるのです。聖母子像をも類推させるこの彫刻の芸術的価値はこれで台無しです。恐ろしいのは当事、純真な美大生の心まで軍国主義はねじ曲げてしまつてゐたことです。限られた集団の狂信が虚偽の宣伝をもつて、隅々まで蔓延してしまつた事実です。

若い人に今はやりのハンナ・アーレントを読んでもらうのもいいかも。

僕はこの母子像についてそんな主旨で中学生の時、作文を書きました。激賞した教師の批評文は僕の作文よりはるかに長かつたのを覚えてます。

僕はこの母子像についてそんな主旨で中学生の時、作文を書きました。激賞した教師の批評文は僕の作文

よりはるかに長かつたのを覚えてます。

今の大でうずくまつたブッシュや習近平の腰の上の母子像なんか製作する学生はないでしょう。

もしもいたら物笑いの種か、評価は下の下でしよう。

「本気でそんな作品を製作することに違和感を感じない時代がもし来たら君たち嫌だろ」と美人の卒業生達に言つてやるうと思つてます。

## 「敗戦」の風景

澤井 洋紀

### 二つの安保

今年（二〇一五年）の夏から秋にかけて、安保法制（いわゆる戦争法案）で日本はアメリカの属国になつてしまふと思い、国会前の集会やデモに高校同期の友人たちと何回も足を運んだ。今から五年前の五月から六月にかけても高校二年生だった私は毎日のように安保改定反対のデモに参加していた。六〇年安保と二〇一五年安保、安倍首相と祖父岸信介、五九年経つて古稀を越えて、また安保に直面するとは思つてもみなかつた。

一九六〇年の高校二年生の時になぜあれほど安保改定に怒り苛立ち反安保の波に身を投じたのか。そこにはやはり、戦争と敗戦があつたように思う。

### 戦死した叔父

家族に直接戦死者はない。しかし、戦争というとまず頭に浮かぶのは母方の叔父齊藤大典の戦死である。昭和一九年一月生まれの私は叔父大典を直接には知らない。しかし、母の話、祖父母の様子から、大典の戦死は幼少年期の私に強く刻み込まれていた。

大正四年、大典は画家の齊藤五百枝の長男として生まれた。齊藤五百枝は東京美術学校の西洋画科を卒業し挿絵画家として活躍した。大典は旧制新潟高校卒業後、東大美学に進学したが、作家を志し、武田麟太郎が主宰する『人文文庫』系に属した。『人文文庫』はファッショニズムと時局便乗作家が跋扈する時代に抗しようとした潮流で田村泰次郎や高見順等の作家がよりどころとしていたが、検閲が強化され発禁が続く中で、昭和二三年に終刊を迎えた。文芸統制はさらに強まり同人誌も発行が困難になり、昭和一七年に同人誌統合で『正統』が生まれたが、大典は若手作家としてその中心を担つた。

市井の人の視線で人の営みを描いていた大典は、留年を繰り返し召集を逃れて作家として生きづけようとしていた。しかし、昭和一八年の学徒出陣で召集され満州に派遣された後、一九年に南方へ派遣される途中台湾沖バシー海峡で輸送船が米潜水艦に撃沈され海へ沈んでいった。大典が軍隊をどう思っていたかは分からぬが、彼は下士官への任官試験を受けず、兵卒にとどまつた。学徒兵への憎悪が渦巻いていた軍隊のなかで任官しなかつた学徒兵はいじめ・制裁の格好の対象だつた。祖母が食べ物を持つて習志野の兵舎に面会に行つた時、大典は頬を赤く腫らしていたという話を祖母はよくしていた。

祖父は大典に一番期待していた。大典の死を祖父は最後まで認めようとしなかつた。私が大学にはいつたとき、祖父は大変喜んだが、そこには大典のことが重ねられていたように感じた。母は私に「大典おじさんが生きていれば洋紀のいい相談相手になつたのに」と何回も繰り返した。

戦争による死者は暴力的に全ての未来を奪われる。殺されていつた人は無念だつたろう。残された家族もまた無念さを抱き続けた。戦争で殺されるのは数としての人ではなく一人一人の人間である。

### 戦争責任

高校時代に「戦争と平和を高校生に聞く」とかのラジオインタビューを受けた。その時に、親の世代はもつと戦争体験を語つて伝えてほしいと話した。今も状況は変わっていないどころか、語り伝える年代の人が姿を消しつつある。

なぜ、戦争体験は語られなかつたのだろうか。あの戦争が敗戦であつたこと、そして、侵略と加害と暴力に満ち汚辱にまみれた戦争であつたこと、そして戦争の責任がついに明確にされなかつたこと、それらが根本的な原因だと思つてゐる。昭和天皇は戦争責任を巧妙にすり抜けた（それは天皇だけでなく日本占領をやり遂げたいと願うマッカーサーとの合作ではあつたが）。せめて退位だけでもしてくれていたら、侵略した国と人々への日本の倫理的な責任を果たせたのにと今も思う。高校生の時、私が一番怒りを覚えたのは、戦犯岸信介が政界に復帰し、首相になつたことだつた。敗戦からわずか一五年しかたつていないのに、なぜそんなことを日本の国民は許したのか。戦争責任の不明確さは、戦争の被害、加害を直視しない日本の退廃を生み出していた。

### 敗戦と占領

敗戦は、幼少期の風景だつた。山の手裏で家の直ぐそばまで焼けて、焼け跡が子どもの遊び場だつた。新宿も焼け跡だらけで、新宿駅の中央口から武蔵野館あたりは、極東組などやくざの支配する闇市で一杯だつた。西口にわたら地下通路は真っ黒な顔に目だけギラギラした浮浪児であふれていた。

下落合の家は熊本城を守つた谷干城の屋敷の一部だつたが、谷家の広い母屋は占領軍将校の住まいとして接收され、巨大な米軍のキャララックがわが家の前によく駐車した。父は往來の妨げになるからと注意しよ

うと思つたが、殺されるかもしれないと諦め、愚痴だけこぼした。母は占領軍にコネをもつ友人に誘われ喜びいさんで都心の占領軍専用のショップ（P.X.）に私を連れていつてくれた。ヌガーチヨコがとてもなくおいしかつたが、豊かなアメリカ商品にあふれた店内は、なにか禁断の場所に入った感じで後ろめたかった。

今の代々木競技場の地域はワシントンハウスと呼ばれ、アメリカ軍の広大な家族住宅団地であった。一面に青い芝生が広がり瀟洒なきれいな住宅が立ち並ぶ日本人立ち入り禁止の風景は山手線からよく見えた。焼け跡だらけのくすんだ風景とは段違いでなにか遠い夢の世界を見ている気がした。

在日米軍による犯罪や事件は少年の耳にも届いた。昭和三年には薬莢拾いにきた主婦を射殺するジラー事件があつた。基地拡張に反対するデモ隊が基地内に入つたとして検挙・起訴された砂川事件（最近この判決を憲法解釈変更の根拠にしたのでまた有名になつたが）も同じ年にあつた。所沢基地の米兵が西武線に向けて発砲する事件もあつた。

こうした占領下の風景や出来事が、違和感としてなにがしか意識の底に形成されてきたように思える。

敗戦はまた即占領だつた。今年、辺野古新基地反対支援で沖縄に行つた時、沖縄は私が幼少年期に見た風景のままだと思つた。

# 焼け跡と憲法に育てられた人生

高原 伸夫

## 焼け跡生活

私が生まれたのは一九四四年二月、東京都新宿区西大久保。銀行員だった父と、神奈川県寒川の農家から嫁いだ母との長男だつた。父が兵役検査に不合格で出征せず、三鷹の中島飛行機に勤労動員で通つていたおかげで、私は今ここに居る。父は中島飛行機が空襲を受けた時、機銃掃射に遭つたが、危うく命拾いをした。新宿周辺の空襲で、借家も周辺も焦土と化したが、私は母と、寒川の実家に疎開していく助かつたという。勤勉な父が毎日書いていた日記帳など、僕しかつた全財産は、灰になつてしまつた。寒川の家にも直接、機銃掃射の空爆があつたと聞いた。結局、死と隣り合わせの誕生だつたのだ。日本全土がこんなふうだつた。

そうして、私の微かな記憶は戦後の大久保、焼け跡で唯一焼け残つた油屋の倉庫での暮しから始まる。窓も殆どなかつたから、雨露凌ぐだけだつたのだと思う。三歳の時、新宿の叔母の所が抽選で当たったバラックを譲り受けて、一間と土間だけの、今で言えば超安普請の仮設住宅に入ることができた。壁は薄い板、屋根は紙にコールタール塗つたルーフィングで、風通しは滅法よく、台風の時には屋根が飛んでしまつて、去つた後に月を眺めて寝た事を思い出す。

バラックでの生活は一〇歳まで、寒川で生まれた妹の後に、双子の弟妹が生まれて盥の産湯に浸かつてい

たのを、三歳半の記憶で鮮明に覚えている。双子が来るとは父母も知らなかつたそうで、生活苦に喘いでいた両親は、生まれたばかりの下の妹を、南方戦線帰りで子のいなかつた伯父の所に養女に出した。ずっと三人兄妹弟で暮らしていくが、実は四人だつた。池上にいた下の妹は従妹のような存在で、大人になるまで、かなり疎遠だつたよう思う。

父は週末は、近所の瘦せた空き地を借り畠にして、芋などにがしかの作物を作つていて。私の小学校時代は、母は外に働きに出ていたので、兄妹弟で遊ぶことも多かつた。もつとも、まばらに家の建つた近所の子供たちも多かれ少なかれ同じ境涯で、子供同士で遊ぶには事欠かなかつた。空き地もあちこちにあり、防空壕まで残つていて（人が住んでいた）、ガキ大将を先頭に走り回つていた。とにかく貧しく、着るものも食べるのも住まいも、なんとか生きてゆくのがやつとという子供時代だつたが、それなりに「生きる力」は身に付けていつた。これが戦後の新宿、そして大久保だつた。

一〇歳の時に初めて父が公庫から借りて家を建て両親は大喜びだつたが、このとき私は小児性腎臓炎で四ヶ月学校を休み、治つたのが丁度一〇歳の誕生日だつた。だからこの二月二・六日という日の不思議を、特別な思いで見つめている。此かこじつけにも見えるが、二・二六事件があつたのは一九三六年、生まれる八年前で閏年、二月が二九日まである年だつたことなども、偶然だがなにか自分の運命のようなものを感じてしまふ。

### 侵略戦争と戦争責任

私が戦争を嫌いなのは、なによりこの、全てが廢墟と化した焼け跡の灰の臭いが原体験としてこの身体に沁み込んでいるからだ。空襲を仕掛けて都会という都會を焼き尽くし、非戦闘民を無差別に殺傷し、果ては

二度までも原爆を投下して大量殺人した米軍の非道を絶対に許せなかつたのだが、元を糺せば天皇制大日本帝国の陸海軍が仕掛けた侵略戦争のことを、小学校から大学まで、あらゆる機会に学んだことが大きかつた。戦後の民主・平和教育は、一通りのものではなかつたのだと思う。教師も生徒も、そして父母も、みんな必死で平和日本を目指していたのだと思う。一部の戦犯逃れや隠れ軍国主義者を除いて…。

侵略戦争に赤紙召集された母の兄弟は二人とも戦死した。中国が大好きだつた伯父は一九三七年の上海事変の戦地・撫順で、もう一人の叔父は、一九四五年六月の沖縄戦線・宮古島で戦死した。二人とも紙きれ一枚で、骨は帰つて来なかつた。母はこの話をするたびに無念極まりない表情になり、私もこの大事な伯父兄弟を、一度も会うことなく失つた。働き手で親孝行だつた息子一人を、「御國のため」軍部の徵兵で失つた祖父母も、どんな思いの生涯だつたろうか。それもあつて、無謀な侵略戦争を最後まで無責任に遂行した軍部と最高責任者・天皇を、決して赦せないのだ。

### 日本国憲法

戦後の日本社会をつくり上げて来たのは、日本国憲法だつた。憲法は、私という人間の「骨格」になつてゐる。戦後の新憲法と共に育ち、この人生を生きてきた。憲法の精神はずつと学校で教わつた。小学校から大学まで、それぞれ先生と友人に恵まれ、平和と民主主義を学び吸収した。非武装・戦争放棄、國民主権、男女同権、思想信条・言論の自由などを、高校の新聞部や大学の教育研究会というサークル活動も通して友人と語り合ひ、行動していつた。それが精神の奥底まで滲み込み、何人も剥ぎ取ることが出来ない、私という人間の一体物となつて、今日に至つてゐる。したがつて、東京裁判は戦勝国の勝者の論理などと嘯き、軍部など戦争遂行権力の戦争責任を一切認めない軍国主義者・日本会議などが大量復活して、靖国参拝し、平和憲

法まで変えて「戦争の出来る国」にしよう、大っぴらに画策している現状は、生理的にも耐え難い。

大学卒業後、総合商社で一二年の海外勤務を含め多方面の仕事をして、「日本の商社が世界中で取引出来るのは平和憲法のおかげだ」との結論に至った。この持論を社内でも展開し続けて、退職するまで譲ることがなかつたが、仕事で大いに貢献したので、こうした世界観のために冷や飯を食うことは殆どなかつた。おかげで海外での取引先の人達とも遠慮なく話ができる、言行一致で信用を得ることも出来たのだと思う。一九九四年統一間もないドイツ、ベルリンフィルのコンサート会場で偶々、尊敬するヴァイツゼック大統領の隣席になり、握手を交わせたことも、こんな人生観・歴史観のおかげだと、巡り合わせの不思議を嘆み始めたことだった（過去に日を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです）『荒れ野の四十年』岩波ブックレット：これがドイツでの先輩からの引継書だった）。

企業というのは飽くまで仕事本位であり、一方、個々の人格はその人の世界観によって裏付けられており、仕事をする能力と世界観の二つの要素がバランスよく育っていることが、現代の人間としての必須要件だとということを、会社生活でも深く学んだし、働く若い人たちにもぜひ肝に銘じてもらいたいと思う。

そして日本には今も、平和憲法とは両立しえない日米安保条約というものがあり、日本は事実上のアメリカの従属国となつていて。戦後七〇年になるというのに、沖縄をはじめ全土に米軍基地が幅を利かせ、誇りも無く彼らに追従する政治家が、國を牛耳ついている。近年注目されている若い論客・白井聰の『永続敗戦論』という本があるが、この、米軍の占領状態が今日も続き、米国の傀儡のような自民党政権が国家権力を握り続けている状況は、まだ敗戦状態が続いているのと同じだと、現代史の深層を的確に論じている。米軍基地があるかぎり間接的であれ米軍の戦争に協力しているので、日本に眞の平和はない、と厳しく認識すべきな

のだと思う。平和憲法を本当に実現するためにも、安保条約を廃棄すべきなので、その方が、いつまでも「世界の憲兵」「戦争中毒」を脱却出来ないでいる米国のためにも貢献するだろうと確信する。

特攻隊を  
海に散らした  
指揮官と  
同じ顔つきの  
政治家がいる

世代の  
架け橋となるう  
戦争と平和の  
この体験を  
語り継いでゆく

# 往時を偲び現代日本を憂う

竹村 紘一

## 始めに

私は昭和一九年二月に新宿は麹町にあつた病院で生まれた。その後、父母の故郷である上佐の佐川に疎開して、その後に父の転勤等もあり、京都左京区松ヶ崎の相愛幼稚園に入園、松ヶ崎小学校に進み、次いで熊本の白川小学校へ転校、小学校三年の三学期に東京世田谷の弦巻小学校へ転校し、以降は杉並区、大田区と移転した。東京在住が長くなつたが、現在は川崎市宮前区に住んでいる。所属する歴史研究会の縁もあり関東高知県人会に入会している。戦争体験や戦後の苦労話をするような特段の材料は持ち合わせておりませんので、最初に原稿依頼が来た時には、遠慮しておりましたが、折角の機会でもあることから、敢えて投稿させて頂くことにいたしました。

以下、思いつくままに書かせて頂きました。ご高覧頂ければ幸いります。

## 大分空襲

私の父は職業軍人ではなく、学生から軍に応召されたもので海軍に配属されたので海軍短期現役と称された。主計少尉に任官し敗戦で退役する時にはボッダム少佐となつた。同期には戦死した人も少なくなかつたとのことで自分は幸運であったと述懐していたことが思い出される。重巡羽黒に乗艦していたが、病を得て

手術の為に本国へ送還され以降は内地勤務であった。上海に上陸した話や海南島へ行つたことや大分や館山にいたことは聞いていたが、余り多くを語る人ではなかつた。大分にいた頃であつたが空襲に見舞われ、母が私を抱いて防空壕に飛び込んだ話はよく聞かされたものである。大分市は、豊後水道が本土空襲の経路に当たつたこと、海軍航空隊及び第十二海軍航空廠が所在したことなどから、数回に亘り、空襲を受けたが、一番大きかつたのは昭和二〇年七月一七日の零時一〇分から一時四〇分頃にかけて行われた空襲であつた。空軍機による照明弾の投下が一六日夜半から行われていたことから、空襲の日付は一六日とされることも多い。既に數度に亘る空襲で破壊されていた市の中心市街地は、この空襲によつてほぼ壊滅し、大分駅から海が見えたと伝えられる。祖母や母からはあんたは九死に一生を得たのですよと良く言われたものである。

## 悲劇のニューギニア戦線

私の母の従兄弟が戦死したのはニューギニア戦線だと幼い頃、祖母や母から何回も聞かされたことを覚えている。母方の本家の期待の跡取りであつただけにその父である祖母の兄は非常に落胆していたと何度も聞かされたものである。幼心にもニューギニアの地名は心に深く刻み込まれ後に太平洋戦争を研究する際には必ず留意したものであった。

太平洋戦争開始後間もない昭和一七年一月、大本営は「ニューギニアおよびソロモン群島の要地の攻略を企画する」と決定し、ニューギニアについては「ラエ、サラモア攻略後にはポートモレスビーを攻略する」とした。この決定により同年三月八日、日本軍は東部ニューギニアのラエ、サラモアに上陸し占領した。これがニューギニアの戦いの始まりであり、マツカーサー大将が率いる連合軍との間で昭和二〇年八月一五日の終戦まで戦いが続けられた。連合軍の優勢な戦力の前に日本軍は次第に制海権・制空権を失つて補給が途絶し、将兵は飢餓や疫病等の過酷な自然環境とも戦わねばならなかつた。ニューギニアに上陸した二〇万

名の日本軍官兵のうち、生還者は僅か二万名に過ぎなかつた。戦死というよりは疫病や餓死による者が多かつたと伝えられている。ガダルカナル・サイパン・硫黄島・インパール等と並ぶ悲劇の戦場であつたのである。直、この戦闘には、台湾高砂族からなる高砂義勇兵や朝鮮志願兵、チャンドラ・ボース支援のインド兵も戦闘に参加していた。

### 真崎甚三郎大将

荒木貞夫大将と並ぶ皇道派の中心人物の一人。皇道派青年将校が起こした二・二六事件においては、青年将校等の主張に沿つて収束を図らんとしたが、昭和天皇の強い反発を招き失敗した。事件後に設けられた軍法会議においては無罪となつた。極東国際軍事裁判で不起訴処分を受け早期に釈放された。同裁判の真崎担当係であつたロビンソン検事は満洲事変、二・二六事件などとの関わりを詳細に調査し、「真崎は軍国主義者ではなく、戦争犯罪はない」「二・二六事件では真崎は被害者であり、無関係」という結論を下し、そのメモランダムには、「証拠の明白に示すところは真崎が二・二六事件の被害者であり、或はスケープゴートされるものにして、該事件の関係者には非ざりしなり」とある。毀譽褒貶の多い人物ではあつたが、その生涯は綿密に調査すべき点は多々あると思われる。

弦巻小学校に大将のお孫さんがいてクラスは異なるが同学年であつたようで、友人等と家を見に行つたことを覚えている。

### 傷痍軍人

中学は電車で大塚の方まで通つていた。渋谷駅前や山手線の中にはアコーディオンを弾く白衣を着て旧海軍や陸軍の帽子をかぶつた義足の傷痍軍人さん等がいて軍歌を奏でながら募金を求めていた。私も時には僅かの金額であるが、募金に応じたことがある。小学校の側にも駄菓子屋さんがあり、そこのご主人も傷痍軍

人で目と片足が不自由であつた。我々は学校の帰りにそこでアイスキャンディーやコッペパンを食べて談笑するのが楽しみであつたことを良く思い出す。さすがに戦後七〇年を経た今日においては傷痍軍人を見かけることは無くなつた。恩給が確立したことと、傷痍軍人も高齢化により多くは鬼籍に入り街頭に立つことは無くなつたとのことである。一時はエセ傷痍軍人が有名神社や八幡様の境内等に出没し募金活動をしていたが、それも過去のことになつた。時代の流れは滔々として歩みを止めないのである。

### 屑鉄拾い

焼け跡から釘とかトタンとかその他の鉄くずを拾い集めて屑鉄屋に売つて小遣い稼ぎをして遊んだことがある。友達等と横一列に並んで手で拾つたりU字型の磁石を使つたりして拾い集めたのである。川に投げ入れて川の中の空き缶や釘を拾い上げたこともあつた。家の家計を助けるとかの発想はなく、友達との遊びのひとつであつたようだ。

### ポンポン菓子

ポン菓子、ドン菓子とは、米などの穀物に圧力をかけた後に一気に開放することによつて膨らませた駄菓子の一種である。巡回業者が子供の集まる広場などにポン菓子製造用の器具を持ってきて、目の前で作つてみせるということがよく行なわれていた。子供の頃はこれが楽しみで、業者が米たとなると、すぐに親から米を貰つて駆けつけたものであり懐かしい思い出になつてゐる。いまから思うと、米を持って駆け付けられるというのは恵まれた環境であつたと思うのである。現在では、路上でポン菓子の製造を見るることは珍しいものになつた。ポン菓子自体はスーパーマーケットやコンビニエンスストアなどで現在でも袋入りで販売されているが買うことはない。時代のなせる業であろう。

### 終わりに

物資難や食料難と言わされた時代ではあつたが、戦後の暮らしもそれほどには苦しくなく恵まれていたようには思ふ。友人の周りにも満州等からの引揚者はいたが戦死者は少なく困窮者も殆どいなかつた。当時としては恵まれた環境にいたと思われるのである。従つて最初の投稿は遠慮させて頂いていたのである。

翻つて、現代の日本を見れば表向きは平和ではあるが、個人の自由の確立や、価値観の多様化と言う一見響きの良い考え方が蔓延したためか、国としての確固とした教育方針に欠け、国家・国民としてのアイデンティティが失われ、政治的昏迷・経済的破綻が亢進する中、世俗的な社会的地位への拘泥と経済的安寧への希求のみが拠り所になる時代となり、精神の荒廃は誠に凄まじく中から腐敗しつつあると言わざるを得ないと思う。勝ち組と負け組が強調され貧富の差が拡大傾向にある中、底の浅いマスコミやスマホ的文化がさらに世を悪くしているように思えるのである。若者には将来への希望とか己の人生をかける夢や志が見つからず、刹那的享樂的な風潮が世を覆つているのを見ると國家の将来に対して悲観的にならざるを得ないのである。今こそ眞の国土出でよの時代であると思う。その意味で歴史を語り継ぐことは意味があるのであると思う。

## 暴走を止めるのは一人の勇気

外山 悠々(外山武成)

### 戦争体験シリーズの編集

私の歳では覚えているはずのない記憶が脳裏のどこかに潜んでいる。それはあの「空襲警報発令！」の拡声器と慌てて窓際の黒いカーテンが閉じられた光景である。ちょうど和歌山に疎開していた昭和二〇年ころの無意識の記憶である。父は終戦間際に召集されたが戦地に赴く前に終戦になり無事帰還した。疎開前に住んでいた東京千駄ヶ谷の家は疎開のあくる日に東京空襲で焼け落ちたと母から聞いた。その母も二年前に亡くなつたが私たちの世代はその最も困難な戦後の始まりを両親の必死の努力で育てられた。

私は疎開先から移った京都で小学校に入学し、以来転校を繰り返しながら東京に出てきたのが昭和二八年、父は夢多き大正ロマンの青年であつたが、その夢は見事に戦争で打ち碎かれ、そのやるせなさを私たちに悟られないように酒でごまかしていた。

ちょうど四〇年ほど前になるが私が編集者という仕事の関係もあつてある団体の反戦に向けての出版に携わつた。もちろんボランティアであつたがほとんど一人で編集をやり、延べ四〇〇〇人ほどの戦争体験原稿の

文章整理をした六〇巻のシリーズ「戦争を知らない世代へ」にまとめた。原稿集めは団体の各地の若者が採取したもので、その内容は素朴ではあつたが戦争という現実が語りかける無意味さと地獄模様に彩られていた。その第一巻は沖縄編を選んだ。先の戦争で最も理不尽に犠牲をこうむった沖縄が反戦の砦になると思つたらである。何度か取材で沖縄を巡つたが、その悲惨さの残像の強烈さに涙を抑えることができない幾つかの場所と出会つた。ひめゆりの塔、摩文仁の丘など数多くの集団自決をした現場である。今でもそこに立つと目頭に熱いものがこみ上げてくる。当時取材にあつた若者が一様に口にしたのは取材相手の語りたがらない態度であつたという。皆一様に「もう思い出すのも嫌だ」と口を固く閉ざし「二度とこの話はしたくない」とけんもほろろの態であつたようだ。

このシリーズ六〇巻には書評や感想文が多く寄せられたが、なかでも心に残つたことは戦争体験を風化させない努力は認めるがそれが戦争への歯止めになるのかといった批評であつた。それは決してこの取り組みへの揶揄として言われたものではない、これまでの歴史を見る限り戦争体験の記憶が歯止めになつていると確信できる事象を見つけることは残念ながら難しい。今日さまざまメディアを通して世界各地の戦場があらさまに報じられ、その悲惨さは誰もが知らされているはずである。にもかかわらず一向に戦火がやむことはない。いつの時代も為政者になる人は普通の人々とは違つた論理で生きているかのようにさえ思える。今世紀に入つても多くの独裁者たちが民主主義勢力によって倒された。だがはたしてそこに平和がもたらされたのか、否である。さらなる混乱に多くの人々は苦しみ新たな戦乱に行く當てもなく瓦礫の中をさまよつてゐる。シリアから逃れてきた人々は行く當てをふさがれ途方に暮れている。これらの現実を見るとき平和世界を維持するこの難しさに茫然自失の思いさえする。

## 戦後七〇年と平和

いまこの国は私たちの歳とほぼ同じく戦後七〇年を迎えた。もう七〇年過ぎたのだから戦争責任を問われ続けるのは勘弁してほしい、戦後世代の私たちは関係がない。そしていま、安倍政権はそのような人々によつて支えられている。それはもう戦争の時代は忘れよう、との意思なのかもしれない。そしてさらには次第にナショナリズムの高揚が図られ始めている。「ナショナリズムは、本来、しづかに眠らせておくべきものなのである。わざわざこれに火をつけてまわるというのは、よほど高度の（あるいは高度に悪質な）政治意図から出る操作というべきで、歴史は、何度もこの手でゆきふられると、一国一民族は潰滅してしまうという多くの例を残している」（『この国のかたち』）と語つたのは司馬遼太郎である。まさにこの手法がいままた繰り返されようとしている。為政者はその気になれば、あらゆるマスメディアを駆使して国民をマインドコントロールしその意図した方向に引きずり込んでゆく。はたして私たちに止める手立てはあるのだろうか、そのことは最後に私なりの覚悟として触れておく。

平和という問題は極めて世界的な事柄である。この国が戦争に巻き込まれなければ良いとか国民が危険にならなければといった限定的ことで済まされることではない。むろんそれは集団的自衛権で解決されることはできない。私たちはかつての戦争への反省として憲法第九条を持っている。世界史的にこのような法はこれまでにまれである。その意味するところは世界のどの国にもあつてほしい地上の平和へ向けての窮屈の法でもある。あらゆる国がこの法を持ちうるならばこの地上に戦火は無くなるであろう。積極的平和主義を言うならば、この憲法の精神を世界に敷衍する行動こそこの国の役目でありそれに値するのではないか。私は編集者人生のおかげで様々な経験をすることができた。ベトナム戦争の最中、米軍の岩国基地で将校に率直に質問し危うく殴られそうになったこともある。また日本の防衛を考えるテーマで自衛隊を巡り田原

総一郎と数か月にわたって取材もした。なかでも心に残る記憶はフィリピンのマルコス独裁政権を倒すきっかけとなつたベニグノ・アキノ（二ノイ）との出会いであった。彼は一九八三年、帰国の途上空港でマルコス政権の兵士に銃弾で射殺された。その直前に運よく雑誌インタビュー企画していた。そのおり「国に戻れば命の保証はないがそれでも戻ることによつて国民を救えるのであれば」と彼は力むことなくその胸の中を静かに語つてくれた。その強靭な意志に圧倒されながらインタビューを終えたことを覚えている。そしてフィリピンは幾多の困難を克服しまがりなりにも今日の民主主義国家を作つた。彼の死がなければフィリピンの今はなかつたであろう。

いざというときに一人の人間として勇気を持つて立ち向かえるか、そして行動できるか。そのことが先にも述べたが私の覚悟である。この国の暴走が止められるとすればそうした勇氣ある一人一人に私たちがなつてゆくほかはない。あの天安門事件の戦車の前に敢然と立ちはだかつた若者、その勇氣をできれば老体の私も持ちたいと思う。そして次の世代の若者にもその気構えを期待したい。

## ミズーリ号

中原 式子（在ハワイ）

爆撃が激しくなつたので父は私たち家族を山口県（裏日本側）に疎開させました。そこでの記憶です。子供たちが食べ物と求めて家に来ました。東京に移つてからは大人も物乞いに来ました。両親は近所の多くの人がしていただように野菜を栽培しニワトリを育てていました。さつまいもを持つて壺焼き芋にしてもらつたのを覚えています。サービスの代わりにお金をもらうよりその人はさつまいもと交換したかつたのです。食料がどれほど乏しかつたかが分かります。傷痍軍人もよく見ました。白い衣服を着てアコードィオンを弾いて物乞いをしていました。

もう一つのなまなましい記憶は原爆被害者のひどいやけどの傷跡です。新宿の伊勢丹の近くで多数のひどい写真を展示して寄付を呼びかけていました。叔父は原爆被爆者です。叔父はなんと原爆が落とされた日の朝に、徵兵された何人かとともに入隊の手続きを行つたそうです（原爆投下は午前八時二六分）。

終戦四か月前の一九四五年四月一日には日本の神風特攻隊が沖縄の沖で戦艦ミズーリを爆撃しました（五か月後の九月二日にはミズーリの甲板上で降伏文書の署名が行われました）。ハワイの真珠湾には戦艦ミズーリ記念館があり、この土曜日（二〇一五年四月一八日）にはミズーリの甲板上で特別ミサが行われます。今年は鹿児島の知覧特攻平和会館から神風特攻隊員の手記などが展示されるとハワイの地元新聞が報じていま

す。知覧特攻平和会館からそれらを海外へ貸し出すのは初めてと言ふことです。特攻隊員たちが母や妻、子供たちに宛てた手紙を読むことはとても悲しく悲惨です。

中近東やアフリカの戦争被害者のニュースを聞いたり見たりしますが、日本がいつまでも平和を愛する国であつてほしいと思います。

# ある地方都市の戦後

成澤 秀

私は終戦の前年に長野県の東部A市に生まれ、昭和二八年（一九五二年）に上京しました。したがつて私のA市の記憶はそのまま戦後の記憶になります。終戦については無論記憶にありませんが、父が語ってくれたことはよく覚えています。父が学生の頃は昭和初期に近い時代でしたのでプロレタリア文学が活発だったと思われます。父も学生として、それらの本を読んでいたと思われます。それを見つけた祖父が怒って、父の書斎の本を庭に投げ捨てるという事件があり、それ以来、父は祖父に反発していました。終戦の報を聞いて茫然としている祖父を見て、反省させるよい機会と思つた父が祖父に問いかけました。

「どうです。親父さんが信じていたものは無くなつた。この事態をどう考えますか？」

すると祖父が父の方を向いて即座に言い返しました。

「こうなつたと思うだけじやわい。」

父はこれを聞いて妙に納得したということでした。

少し解説を加えます。

祖父は、戦前、戦中、戦後にわたり、A市の市長を務めました。従つて戦争中は軍の方針に従つて市政を行つてきました。祖父も父もいなくなつてから知つたことでしたが、祖父は千曲川の河原を整地して飛行場

として使用するように陸軍に働きかけていたようです。飛行場は完成しましたが、日中戦争拡大に伴いその飛行場は陸軍に献納され、戦時下にはその飛行場から特攻機が飛び立つたこともあつたようです。敗戦によりA市飛行場は米軍に接收されて閉鎖となり、いまだに信州には飛行場がありません。そういう祖父を見てただけに、父は敗戦によりすべてを失つた祖父が自暴自棄に陥るのではないかと思つたわけです。しかし、案に相違して祖父はすっかり開き直つて戦後のA市市政を考えていたわけです。

私の記憶しているA市は決して豊かではありませんでしたが、周囲の人々は明るく楽しげで、商業も活発な街で、食用油等は身近で調達しても、洒落たものを買うとなると軽井沢あたりからもA市に買い物に来るという様子でした。戦後の一時期東京のような人口過密な都市では食料不足が深刻でしたが、地方都市はそれ程でもなかつたと思われます。無論、食料に恵まれていたという訳ではなく、小学校から帰ると、「お腹すいた。何か食べるもの無い？」と言つて、台所をのぞき、「蜂の子でも取つて食べなさい。」と言わられて蜂を追いかけて蜂の巣を探し回つた記憶もあります。

祖父と同じように、多くの日本人が敗戦を機に開き直つて歩き始めたことが奇跡の復興へとつながつていつたのではないかと思っています。したがつて阪神淡路大震災で神戸が壊滅的な損害を受けたときもすぐ復興に向けた取り組みが始まり、全国全世界からの支援もあって見事に立ち上がりました。そして東日本大震災にも果敢に立ち向かった日本人でしたが、福島の原発事故だけが今も大きく立ちはだかっています。その原発事故を体験した日本が脱原発を打ち出すかと思いきや、安倍政権が原発保護もしくは原発輸出まで主張したので、いささか驚いた次第です。忘却とは忘れ去ることなりと、前進することも時には必要ですが、矢張り、国家としては過去の歴史を正しく受け止め、歴史から多くを学び、反省すべきは反省して進んで欲しいものです。

# その子、どこの子だい？

平野 卿子

わたしは戸山高校の卒業生ではありませんが、友人に誘われ、今回の文集に参加することになりました。

## 映画と書物からの衝撃

戦争の恐ろしさ、酷さ、愚かさについて伝え続けることの大切さは、いくら強調してもしすぎる事はありません。

しばらく前、NHKのラジオ深夜便で、筑紫哲也さんがある大学で講演したとき、日本がアメリカと戦つた事を知らなかつた学生が大勢いたことに驚いたという話を聞きました。そういう若者が多いことは、ご存じの方も多いでしょう。けれども、そのときわたしが衝撃を受けたのは、これが一九八〇年代の話だということです。戦争の記憶がそれほどの速さで風化していたとは…。

戦争の傷跡が色濃く残る時代に生まれ育ちながら、わたし自身はのほほんと生きてきました。そのいちばんの原因是むろん、わたしがぼんやりした少女だったことがあります。けれども、それだけではないような気もするのです。つまり、わたしたちの育つた時代が高度成長まつさかりで、今日よりは明日、明日よりは明後日というように、未来に希望を抱くことができたこと、その結果うしろを振り向かない、そんな時代だつたこともあつたのではないかと。

わたしが戦争というものを初めて意識したのは、中学二年のときに読んだ『アンネの日記』がきっかけでした。よく知られているように、ユダヤ人の少女のこの日記は、世界的なベストセラーになり、映画にも舞台にもなりました。とはいっても、このときのわたしの関心は、戦争より、アンネという自分と同じ年の一人の少女の生き方のほうにより強くむけられていたような気がします。

そして、高校二年のときに、『十二階段への道』と言うドキュメンタリ映画を見て、震えるほどのショックを受けました。これは、ナチスの犯罪を初めて詳細に記録し、全世界を震撼させた作品です。解放当時のアウシュビッツがスクリーンに映し出されたとき、わたしはこれが現実の光景だと知つて戦慄しました。なぜこのような作品をひとりで見に行ったのか、その辺の記憶は曖昧です。ただ、映画館から出たときに冷たい雨が降っていたこと、それで気持ちがいつそう沈んだことは覚えてています。

『二十四の瞳』や『ビルマの豊饒』など、日本にもすぐれた映画や書物があつたにもかかわらず、戦争について考えるきっかけとなつたのが外国の作品だというのが意外な気がしないでもありませんが、先に述べたような事情で、自國のことになるといまひとつこなかつたのかもしれません。あるいは、無意識のうちに避けようとしていたのかも。

日本の戦争について初めて自分に引き付けて深く考えさせられたのは、なんといっても映画『人間の條件』（五味川純平原作・小林正樹監督）です。見たのは初公開されてから一〇年ほど経つたときで、わたしは二七歳でした。忘れられない作品です。その後、同じく小林正樹監督の『東京裁判』が公開され、冷戦を挟んでアメリカが変貌していく様子を知りました。一度見ただけではわからないことも多く、ずいぶん経つて再公開されたとき、もう一度見に行きました。

## 父の復員

昭和二〇年生まれのわたしですから、もちろん、戦争中の記憶はありません。父は何度か出征したと聞きましたが、戦争について子供たちに語ることはついにありませんでした。でも母が繰り返し語った次のエピソードは強く心に残っています。

二〇年の夏の夕暮れ、姉の手を引き、わたしをおぶつて当時疎開していた秦野の村を歩いていたとき、向こうから復員兵がやってきた。薄暗い中ではじめは誰だかわからなかつたが、近くまで来たときに父だということがわかり、母は夢中で「あなた！ 帰ってきたのね！」と叫んだといいます。

「どころがね、お父さんたら、立ち止まつたきり何も言わないの。お母さん、何度も言つたわ。『あなた、どうしたの？ わたしよ』すると、やあつてお父さんはやつとこういつたの。『その子、どこの子だい？』

それで初めて手紙が着いてなかつたことがわかつたのよ」

父が出征したあとで、わたしがおなかにいることに気づいた母は、戦地の父に宛ててそれこそ数え切れないと、気が気じやなかつた、と母は言いました。

その話を思うといつも、小学四年生のときに転校してきたKさんのことが浮かんできます。初めてKさんの家に遊びに行つたとき、おやつが出され、Kさんとわたしが食べようとする、縁側で繕い物（この言葉もう死語かもしませんね）をしていたお母さんが、針の手を休めて「お父様にご挨拶は？」と言つたのです。

Kさんは、はつとしたように居住まいをただし、仏壇に向かつて「お父様、いただきます」と言つて、丁寧にお辞儀をしました。わたしもあわてて一緒におじぎをしたのをいまでもよく覚えています。

そのときはじめて、Kさんのお父さんが軍人（陸軍少佐）だったこと、戦死されたことを知りました。

まもなくKさんはふたたび転校してしまつたので、それきりになりましたが、母の話を思い出すたびに、Kさんのお父さんは、Kさんが生まれたことを知つていたのだろうかと思つたものでした。

このように、わたしの戦争に関する思い出はほんのわずかなものです。それでもわたしは、「戦争は嫌だ、絶対に繰り返してはならない」という気持ちだけは強く抱き続けてきました。なぜか。それは、わたしたちの生きてきた時代には戦争を経験した人がまだまわりに大勢いて、その人たちがさまざまな手段で戦争の悲惨さ、恐ろしさを伝えてくれたからです。

## 戦争と言論・表現の統制

とはいえる、これらはすべて戦後の話です。戦争中は厳しい言論統制によって、「本当のことを伝える」とはできなかつたのですから。国を挙げて戦う、つまり「勝つ」ことが至上命令の社会では、いとも簡単に言論や表現の自由の制限、いや、剥奪が起こります。これは世界中どこでも同じです。

日本の同盟国だつたドイツでも、ヒトラーが政権を取つたあと、表現に対する弾圧が始まりました。世界の映画界をリードしていたウーファー社は、ヒトラーが政権を取つてからは、ナチスのプロパガンダ映画しか作れなくなりました。その結果、ビリー・ワイルダーはじめ、大勢のすぐれた映画人がアメリカへ亡命し、のちのハリウッドの繁栄を導いたのです。

けれども、日本の映画監督には亡命する先などありません。その意味で忘れられない作品は、昭和一九年に作られた木下恵介監督の『陸軍』です。この映画は国策映画として陸軍省の依頼で制作されました。しかし、ラストシーンで木下監督は、出征する息子の姿を追つてただひたすら走り続ける母親（田中絹代）の姿を執拗に追うことで、どんな言葉よりも雄弁に戦争に対する自分の思いを表現しています。（結局この場面が原因

で、木下恵介は松竹に辞表を出し、映画が撮れなくなります)。必死で息子を追い続ける母親の姿に、わたしは涙が抑えられませんでした。「母親の愛」という筋書きで検閲を通過させ、したたかに無言の抵抗をした木下監督は、戦後も『二十四の瞳』と『さう素晴らしい作品で戦争の悲劇を訴えました。

すでに「古稀」を迎えたわたしたちの世代ですら、戦争を知りません。わたしたちは前の世代の人たちを通じて、かるうじて戦争の恐ろしさを知ることができたのです。でも、これからは? それを思うと、焦りにも似た気持ちを覚えます。

## 私の戦後七〇年

藤岡 武義

### 満鉄技術者の父

私は昭和一八年六月、旧滿州新京特別市（現長春）で生まれた。

父は満鉄の技術者。就職の選択肢としての満州は、大学は出たけれどの就職難時代に内地で職を得られないからためか、満洲での雄飛を求めてのことか、は聞き漏らした。当時の満鉄といえば国策の大企業、植民地での生活などもあり、今でいうメイド付きの社宅生活でなに一つ不自由ない、と言えるものだったようだ。

一〇年ほど前に、兄弟で旧満州旅行をした際に訪ね当てた社宅の建物はまだ現存しており、石造りのメゾネットタイプの我が家は、現在六所帯が住んでいると聞いた。住民の方々は我々のことを聞いても、ひそかに恐れていた反発を示すことなどなく、親しみ深く迎えてくれた。

ソ連参戦後、満鉄の本社社員の家族は、北朝鮮のチンナンボというところへ半年ほど疎開させられた。一年生の長女から乳児の次女（妹。わたしは二歳）まで「男二女」の四人を一人で連れていた母はさぞかし不安であつたろう。当時は消化器が弱く、いつも下痢をしていたらしい。父は敗戦後再会したとき、次男（わたしのこと）だけは生きていないことも覚悟していた、という。

終戦後二年間、旧満鉄の技術者として列車運行のため父は徴用されていた。ソ連軍に眉間にピストルを突きつけられて、軍用列車のダイヤグラムを組まされたときは冷や汗をかいた、とよく言っていた。すでに中国の覇権をめぐる国共内戦は始まっており、長春も戦場だった。国民党軍と八路軍の長春争奪戦は毎日支配者が変わるほどのつばせり合いで、父が市内に買い物に行つたとき、往々と帰りで支配軍が変わっていたこともあつたという。父は、共産主義は嫌いだが、あのときの八路軍は規律がよかつた、とよく述べていた。われわれは一九四七年九月に引き揚げてきたが、その後長春争奪戦は苛烈なものになつた。八路軍は国民党支配下の長春を閉み、食料・電源を止めるなどの封鎖作戦を実施した。このため、数十万の長春市民・在留邦人は飢えに苦しみ、餓死や人肉食が横行した。このことは山崎豊子の「大地の子」にも出てくる。この間の事情は、中国評論家をされている遠藤晉（ほまれ）氏の「チャーブ」文春文庫上・下に詳しい。

### 引き揚げの体験

藤原ていの「流れる星は生きている」にあるような、朝鮮半島を徒步で南下して引き揚げてきた人々、さらに開拓農民出身の残留日本人として苦労された方々と比べて、満鉄社員は引き揚げにおいても鉄道を優先的に使えるなど優遇されていたようだ。

残留孤児といえば、姉の長春学園時代の友人の一人が、残留孤児になられ、帰つてこられた話を聞いている。私たちには私が四歳の秋に中国の葫蘆島（こうとう）経由佐世保に引き揚げてきたが、実はこの時までの記憶は全くない。初めての記憶は、東京へ来るまで一時世話になつた母の三重県の実家の間取りである。この実家で、私が引き揚げの途中で覚えた「どこまで続くぬかるみぞ」という引き揚げの歌を歌つて、皆の涙を誘つたという挿話はその後何度も聞かされた。歌のメロディーは覚えている。

わたしの現在の思想形成のうえで重要なファクターとなつたもののひとつに、満州出身の引揚者だったといふ出自がある。他の多くの戦争被害にあわれた方に比べ、それほど過酷な幼少時を送つたとは言えないが、戦争に翻弄されたことは事実である。そして何よりも中国侵略の一員であつたものの家族だったという自覚は、社会や政治を考える上で避けては通れなかつた。その結果わたしは中国に対して贖罪意識を持つてゐる。日本国民は世代を問わず植民地支配と侵略に対し謝罪すべきであり、安倍首相の、次世代に謝罪を続けさせられない、との談話は全く受け入れられない。そのことと現在の中国政府の覇権的行動への批判とは、全く別問題である。

### 中学時代の恩師

もうひとつ私の思想形成に大きな影響を与えたのは中学、高校での教育である。ここでは中学時代のある先生のことを書きたい。それは、中学生の時担任をしてくれた仲松弥秀先生である。先生は当時五〇歳。地理学を専攻し、戦前は朝鮮の師範学校で教授を務められたが、教え子を戦場に送つた反省から戦後一から出直す覚悟で小学校教諭として再出発し、私が中学生の頃は中学で教えるようになつてゐた。その後沖縄に戻り、琉球大の教授として沖縄の地誌学、民俗学で大きな業績をあげられた。先生の授業は大変興味深く、たとえば地理的決定論、あるいは環境決定論の誤りを中学生にわかる方法で教えてくれた。私が大学で地理学を専攻したのには、多分に先生の影響がある。思えば中学時代に大学レベルの教育を受けたことになつたのは、幸運としか言えない。その後先生は琉球大学生協の理事長をお引き受けになり、退職後は地域生協の理事長も務められた。のことと私が学生時代から大学生協の活動をし、生協に就職したのには直接の関係はないなかつたが、何かの縁を感じてゐる。

さらに高校時代の安保闘争への参加は思想形成に決定的影響を与えた。安保条約の批准を許したが、われわれの鬭いは続く、との当時のリーダーたちの演説に煮え切らないものを感じたのは事実だが、半世紀を経て振り返ってみると、反戦・民主主義への市民の志向性が物理的・明示的に示されたことが日本の海外派兵への制約となり、曲がりなりにも戦争をしない国日本が維持してきたことを最近いまさらのように感じる。この流れが大きく変えられようとしている事に、危機感を感じている。

## 戦争が遺した名前

水野 加南

### 幼年・小学校時代

私は一九四三年一二月生まれ。まだ日本は戦争に勝つていて、南の島をドンドン加えていました。それで加南という名前。同期生には南海・勝子・征夫など戦争由来の名前の人々が沢山。父が小学校の教師だったため出征せず、また父の親が郷里で農業を営んでいたため、ほかの方に比べ食糧に恵まれていたと思います。それゆえ、ほかの方より戦争の記憶が薄いように思います。みなが食事に食べるスルメをおハツに食べていました（今のように甘いお菓子は皆無）。そのため（？）虫歯が一～二本しかありません。

父の郷里（兵庫県淡坂市）に疎開。学齢前に兵庫県尼崎市に疎開地から転居。キリンビールの工場のあるところで、小学校の生徒は窓から出入りするようなところ。教育環境が悪いとの判断で隣の兵庫県西宮市の新設校に兄と私を入学させるべく、母がその学校に赴任。

兄がそこへ入学。私はまだ幼稚園生。学校帰りにお米の配給切符を持つて、お米を米屋にもらいに行くのが兄の仕事。あるとき切符を紛失。今でこそ米はスーパーでも買えますが、当時は米は配給制。数量に限りがあるから、配給切符がないともうえない。切符紛失したので我が家は米なしの生活を余儀なくされました。

西宮では母の同僚の家の二階を間借り。二階から西宮球場がみえました。

翌々年、私が小学校入学。担任は代用教員。母も一年生担任。母は師範学校卒の先生では差がある!」と思いましたが母は別に気にもとめていなかつたようです。私は以後小学校四年まで、担任は代用教員でした。

## 東京へ

昭和二六年に、父の仕事の関係で東京へ転居。東京駅から乗つたタクシーは木炭車。ちなみに上京してすぐかかった歯医者が、当時すでにブラッシングをうるさく言っておられたのですからすごい。そしてすでに矯正歯科の勉強もしておられたようです。今もこの歯科医院に通院していますが、代日今は定期的にクリーニングに通院。八〇歳・一・〇本は可能とのお墨付き。「歯並びがいい」と歯科衛生士に褒められます。「歯並びがいいからクリーニングが楽」とも。楽でもクリーニング代は安くならない。歯の本数が少ないと安くなるとか。床屋は髪が少なくても料金安くならないけれど。

小学校二生で東京の学校に転入したわけですが、授業は二部授業。午前中下級生。午後上級生という制度。教室が不足していたゆえの制度。

給食はララ物資の脱脂粉乳。給食のおばさんが焦がしたときは焦げ臭くて困りました。コーヒー味の時は人気でお代わり続出、それにコッペパンとおかず。肝油ドロップも。まずくて飲みにくくて。最近読んだ本(二歳くらい年下の人が書いた本)では肝油ドロップに砂糖がまぶしてあつたとか。給食は次代を担う若い世代の体をおもんばかり始まつたのだと。

同級生には親を戦争で亡くした人が沢山。母が担任に「娘が勉強しない」と言つたら「両親そろつてている

だけで幸せと想いなさい」とさとされたとか。

洋服はつぎを当ててきていました。貧富の差といいますが当時は皆が貧しかつた。ナイロンのストッキングは大学生になつても高級品。伝線をつくろつてくれる商売がありました。大学生の後半の頃にノンランという伝線しないストッキングが登場。

中学校の校舎は兵舎だったもの。床に穴が開いていました。ダニも出ました。そういうえばダニ・ノミ・シラミ駆除のために頭からDDTを振りかけられましたね。

中学生の頃にはもうあまり戦争(戦後)を意識することはなかつたように思います。ただ同期生の伝記を読んだときに「高校生の時に、父が舞鶴に帰ってきた」というのを読んで、「アーコの人は、私と違つて、高校まで戦争は終わつていなかつたんだ」と思いました。

高校時代、校門の前で配られる予備校などのチラシの裏が白いと計算用紙に使えるので、うれしかつたですね。今の子供はわざわざこれのために紙を買うのでしょうか。私は今でも沢山メモ用紙があるのに、広告の裏の白いところを使つていますね。

# 戦争のもたらすもの——被害と加害を見つめて

三井 畑友

## 父の召集とボルネオ戦

私の父母は一九四一年三月に結婚した。父は三〇歳、母は一九歳であり、東京都中野区桃園町に居を構え、四年三月に私が生まれた。折しも父は東京第二師範学校（現在の東京学芸大学の母体の一つ）の教員となつたが、それも束の間、五月に臨時召集（いわゆる「赤紙召集」）で金沢の陸軍東部第四九部隊に入営した。新妻とまだ生後数か月の私を残しての入営は、本当に後ろ髪を引かれる思いであったに違いない。実際、九年二月に弟・妹とで、熱海・伊豆山温泉に父母を招いて金婚の祝いの席を設け父は上機嫌で思い出話を語つたが、そこで「子供が生まれて一ヶ月で『赤紙』が来てしまった。入営のために新宿駅を発つとき、伯母だけが見送りに来てくれたが、子供をおぶつた妻を見て、『こんな可愛い坊ちゃんがいるんだから生きて帰つて下さいよ』といいながら、自分がわんわん泣いている有様で、僕も本当に生きて帰ることができると慘憺たる気持ちだつたが、何としても生きて帰らなければと意志を固めた」と述べていた。

このあと、翌年一九四五年八月の敗戦までの父の軍隊生活は、他の大多数の兵士がそうであつたように辛酸を極めた。新兵教育のあとまず向かわされたのは中国東北部、日本が虚構の満州国を作つて支配していた地域である。ここでは「閏特演」（閏東軍特種演習の略）以来、大兵力を集中させていた、その補充部隊で

ある満州第四一四部隊に配属されたのである。しかし、西方の独ソ戦線でナチスは敗走を始め、「閏特演」の意味は失われ、日本の南方・太平洋地域での戦線が苦境を呈するなかで、大本営は関東軍の部隊を次々と南方に送り始める。その一環で、八月、独立混成第二五連隊に転属させられた父の属した部隊も輸送船に載せられて、ボルネオ島をめざした。輸送船はボルネオを目前にして米軍の攻撃を受けて沈没、兵士たちはほとんど着の身着のままで島に上陸を余儀なくさせられる。しかし、戦争はまだ継続しているので、何のことはない、ボルネオ島のジャングルの中を連合軍に追われて、ただ逃げ回るだけに到着したようなものである。もちろん兵站も途絶えているから、食糧はほとんどなく、野生の動物・植物をとつて食うという悲惨な逃避行が始まる。栄養不足の上に、マラリヤなど熱帯性の流行病も多い土地であるので、兵士はバタバタと倒れ、敗戦・降伏時の生存率は一〇%にも満たないといわれている。

そうした悲惨な戦線で父が生き延びることができたのは、奇跡的と言えよう。「生きて帰る」という強い意志がそうさせたのかもしれないが、とにかく私は戦争遺児になることを免れることができた。前述の金婚の祝いの席では、この時の経験を父は次のように語つている。

「ジャングルでの六〇〇kmの行軍で一〇人中生きて帰つたのは一人くらいという、惨めな状態だつた。本当に命の危険を感じたことは四度あつた。無茶苦茶に撃つてくる米軍の激しい銃火を浴びて、同じ部隊の、金子という同郷の准尉と一緒に横穴に飛び込んだが、銃弾で壁がどんどん崩されてゆく。『ああ、これでお終いか』と思つたとき、准尉が恐怖から穴を飛び出し、たちまち銃弾に当たり、肩からバアーッと血を噴き出させて死んでしまつた。穴のなかに残つていた僕は生き延びることができた。こうして部隊の七千の同僚は野垂れ死に同然で死んでしまつた。こんな苦しい状態だから、腰に下げている手榴弾のピンを抜けば楽になるかもしれないと思ったときもあつたが、同じことを考えるものもあつて、前方でバーンと爆発音がして、

ばらばらになつた肉片が降つてくるんだ。こんな悲惨な目はいやだと思ひ直し、歩き続けて帰つてきた。やはり『生きて帰る』という強い意志をもつたものだけが生き残つた。自分で自分をコントロールする意志の力だ。僕もその意志の力で生き延びることができた。生きて帰つてきて本当に良かつたと思った」

ボルネオ島北部のボーフォート(Beaufort、現在マレー・サバ州の町)で終戦を迎えた日本軍は武装解除され、父はオーストラリア軍が管理する捕虜収容所に入れられる。ただ、そのまますぐに帰国・復員とはならなかつた。日本軍の降伏を受け入れた各地では、降伏条件であるボツダム宣言に基づき、戦争犯罪人の追求、裁判が行われる。その法廷で日本側通訳を務めるという新たな仕事を割り当てられてしまつたためである。これも辛い役目であったが、ようやく四六年七月に帰国、復員し、原職に復帰することができた。

### 戦犯裁判

戦争犯罪に対する国際裁判といえば、ドイツにおけるニュルンベルクと東京での極東軍事裁判が著名であるが、ここではヘルマン・ゲーリング、東條英機などA級戦犯を裁いたが、B・C級戦犯を裁く法廷は各地に設置され、そこでも多くの戦争犯罪が暴かれると同時に、数々の悲劇も生じた。ここでは、学徒出陣によつて陸軍に入當し、シンガポールにおける戦犯裁判で死刑に処せられた木村久夫(きむらひさお)の例を述べよう。学徒出陣とは、一九四三年一〇月政府による「在学徵集延期臨時特例」公布によつて、在学中の学生が召集され、陸軍・海軍に入隊したことを指す。当時、大学など高等教育機関に在学する学生は二〇歳の徴兵年齢に達しても猶予を受けることができた。主として文系学部の学生に對してこれを撤廃したのが「臨時特例」である。日本の戦線が拡大し、膨大な軍隊を動員してゆくなかで、下級将校など軍隊幹部の不足が深刻となり、これを補うために学生に日を付けたということが真相であつたと推定される。この措置によつて全国の国

公私立大学・高等専門学校から徵集された学生の総数は相当な規模であつたはずだが、殆どの大学・高専にその記録がなく、正確な人数は未だに不明のままである。いずれにしても数万人の学生が学業半ばで学窓を去り、ペンを銃に替えて、戦地に赴くことになつた。四三年一〇月二一日東京・神宮外苑競技場では「出陣学徒壮行会」が開催され、東條首相による訓辞のあと、出陣学徒代表・江橋慎四郎(東京帝国大学文学部学生)による答辭には「生(せい)らもとより生還を期せず」の文言があつた。その通り多数の出陣学徒は再び学窓に還ることができなかつた(江橋自身は幸運にも生還するが)。

### 木村久夫の手記

戦後、学徒出陣あるいはそれ以外でも大学・高専卒業生で戦地に没したもの的手記を編纂し、再びこのような悲劇が起こらないよう決意を示すため「戦没学生の手記」出版が相次いだ。その最初は四七年刊行の『はるかなる山河に—東大戦没学生の手記』である。これを全国規模に広げ、四九年一〇月に『きけわだつみのこえ—日本戦没学生の手記』が出版された。全国の戦没学生の遺族から寄せられた三〇九名の手記から選んで七五名のものを収録している。この手記集を題材とした映画『きけわだつみの声』(五〇年六月公開、東映製作、関川秀雄・監督)や彫刻『わだつみの像』(本郷新)も知られている。木村久夫による手記は、『きけわだつみのこえ』の中でも特に印象的・衝撃的である。紹介されている木村の略歴は、一九一八年四月大阪生まれ、四二年四月京都大学経済学部入学、四三年一〇月入営、四六年五月二三日シンガポール・チャンギー刑務所にて戦犯刑死、當時陸軍上等兵であつた。手記は処刑をまつ刑務所のなかで、田辺元著『哲学通論』<sup>64</sup>の余白に書き込まれ、死後遺族に返還された。日本戦没学生記念会監修『きけわだつみのこえ—日本戦没学生の手記』(光文社、64年)からその一部を引用しよう。

日本は負けたのである。全世界の憤怒と非難との真只中に負けたのである。日本がこれまであえてしてきた数かぎりない無理非道を考える時、彼らの怒るのは全く当然なのである。今、私は世界全人類の気晴らしの一つとして死んでいくのである。これで世界人類の気持ちが少しでも静まればよい。それは将来の日本に幸福の種を遺すことなのである。

あらゆるものその根底より再吟味するに、日本國の再發展の余地があるのである。日本はすべての面において混乱に陥るであろう。しかし、それでよいのだ。ドクマ的なすべての思想が地に落ちた今後の日本は幸福である。「マルキシズム」もよし、自由主義もよし、すべてがその根本理論において究明せられ、解決される日が来るであろう。日本の眞の發展はそこから始まるであろう。すべての物語が私の死後より始まるのは悲しいが、私にかわるものと立派な頭の聰明な人が、これを見、かつ指導していくのである。何と言つても、日本は根底から変革し、構成し直さなければならぬ。若き学徒の活躍を祈る。

しかし國民はこれらの軍人を非難する前に、かかる軍人の存在を許容し、また養ってきたことを知らねばならない。結局の責任は、日本國民全体の知能程度の浅かつたことにあるのである。知能程度の低いことは結局歴史の浅いことだ。二千六百余年の歴史があるといふかも知れないが、内容の貧弱にして長いばかりが自慢にはならない。近世社會としての訓練と経験が足りなかつたといつても、いまではもう非国民として軍部からお叱りを受けないのである。

私の学生時代の一見反逆者として見えた生活も、全くこの軍閥的傾向への無批判的追従に対する反発にほかならなかつたのである。

以下二首処刑前夜作

おののきも悲しみもなし絞首台母の笑顔をいだきてゆかん

風も雨もやみたりやわやかに朝日をあびて明日は出でなん

戦没学生の手記の収集・出版は実は先行例がある。世界史上初めての総力戦となつた第一次世界大戦では、ドイツ帝国がやはり学生の戦線動員を行い、敗戦後「ドイツ戦没学生の手紙<sup>注1</sup>」が編纂された。しかし、その不戦の意味も空しくドイツ（ナチス・ドイツ）は再度世界大戦を引き起こし、ドイツは再度「戦没学生の手記」を編纂する羽目に陥るのである。こうした「歴史の繰り返し」を許すか、許さないか、それは現在を生きているすべての人々に課せられている問題である。（一〇一五年四月）

注1 関東軍の「関東」とは、東京を中心とする関東地方を意味するのではない。中国・河北省の山海關より東という意味で、遼東半島先端の租借地に名付けられた関東州に駐在する日本陸軍部隊の名称であった。日露戦争後に日本が獲得した関東州における権益保護を目的として一九一九年設置されたが、逐次拡大され、満州国創設ののちは、その「首都」新京（現在の吉林省長春）に司令部を移し、事实上満州国を牛耳り、日々の独断専行の軍事行動によつて十五年戦争への道を開いた。四一年六月ナチス・ドイツとソ連との間で戦端が開かれると、日本の戦争指導部は機あればシベリアからソ連に攻め込むべく、満州国に駐留していた関東軍に七〇万人以上の動員兵力を集中した準備行動。企図秘匿のため「特種演習」の名称をつけた兵の精神誌》（岩波書店、一九〇六年一月）。

注3 「ドイツ戦没学生の手紙」（岩波新書赤版R-22、一九一八年一月）

参考 田代三良著・秋谷徹雄編『インパール作戦敗軍行』（本の泉社、一九〇〇年七月）

# ミンダナオ島で死線をくぐりぬけた父

宮後 康恒

明らかに私を身に宿す母が父と二人で撮った写真がある。父は軍服で帯刀し、母は着物である。一九四二年の冬平壌へ向かう前のもの。私は半年後の八月に生まれる。その直前父は駐屯地から祖父に手紙で男女各三名の名を挙げるも祖父により名をと頼む。この写真と手紙は母の遺品から出てきたものでこれに加え南方の島から父が文字の読みぬ私宛に出した便りが二通ある。

さて戦後七〇年の今、当時を辿るには時空を超える手立てがいる。手元に山川出版の『世界史総合図録』がある。ヨーロッパ戦線と太平洋戦線が並ぶ頁に日が止まる。前後の頁の年表には開国から明治、大正、昭和に至る九〇年余りを戊辰・西南の内戦を経ながら列強に伍し日清・日露、第一次大戦から敗戦まで国を挙げて突き進む様が如実である。戦(いくさ)に明け戦に暮れる。

日韓併合が一九一〇年。以後朝鮮は大陸侵攻の橋頭堡扱い。冒頭の写真の頃既に国は敗色濃厚で、精銳部隊を対ソから対米の南方防衛に回さざるを得ない陸軍は、一九四四年父の部隊をミンダナオ島に派遣する。予知した祖父は死地に向うまでに息子に孫の顔を見せよと祖母と母、叔母の三人で生後半年の私を関釜連絡船で朝鮮に行かせた。ミッドウェー海戦、ガダルカナル陥落と米国の反攻は一九四二年に始まる。ミンダナオ島からの便りは、一九四四年に葉書で出され軍事郵便扱い、一隅が切除された文面にはバナナもあり生活

に困らず、俸給の使い道もなく日本に送るので何か買つてもらい、祖父母にも気遣い忘れぬようと。米軍の艦砲射撃と上陸が始まるのはこの後すぐ、ジャングル逃避行が一年近く続き一九四五五年秋投降。二通目は一九四六年冬、レイテ島の捕虜収容所からで、ライスペーパー両面にインクの文字が並ぶ。米軍の病院気付だが将校扱いの収容所ゆえ心配無用、送還の便船が近々決まる。率いる中隊の部下を殆ど失い、生きて虜囚の辱めを受けずと自決を命ずる上官の連隊長を説得したと父から聞く。

大雪の日お堀端のビルにマッカーサーがいると父が指差したのは一九五一年一月と今その記憶を検証する。同年九月サンフランシコ講和条約と日米安保条約が調印。何故このとき学校を休み伯父の見舞と称し大阪から東京に行つたか理由は訊かず仕舞い。ミンダナオでの戦いや捕虜生活の話は何度か聞いた。戦後の混乱期家族を守るために働き、押しつけの民主化で労働組合の委員長もやつたと自嘲する父であつたが反戻、反米を口にはせず。愚痴るより先を考えると幼い頃論された記憶あり。東京に住み落成した武道館を見に行くが、傍らの靖国神社には行かず。A級戦犯合祀の前である。

前年に日中戦争が始まった一九三八年には休職し見習士官集合教育を豊橋で受け、応召に備えた。レイテ島からの手紙に國のために捧げたこの七年は何だったのかともあつた。靖国に足を向けない心中を思う。父は帰還後二〇年で逝つたが戦友が集うミンダナオ会の元部下は慰靈に訪れた島の写真を母に送つてきた。

# 私の太平洋戦争

柳澤 務

我々の世代では、還暦は現役を退いてもその直後のことであり、まだ人生の現役モードである。古希となると、現役の一線を退いて一呼吸おき、肩の力を抜いて時間的余裕も得て、生活、思考のスタイルも大きく変わってくる。戦後六〇年と七〇年ではだいぶ向き合い方が違う。戦後七〇年、終戦間近に生を授かった世代には将に人生七〇年と重なる。

私が中学の頃から父は単身赴任で名古屋、水戸と転勤し、私も家庭を持つて自分のこととして正面から戦争を捉えてみようと思った年頃には、他界していく詳しい正確な情報を得ることもなかつた。父は、戦地に行くこともなく内地で化学、航空機関連の会社勤めを続けていたが、そんなことで戦争体験や戦後の苦難の話の特別の材料は持ち合わせていません。しかし、せつかく勧めてもらつた機会なので、社会で歩んできた七〇年をふり返つてみて、第二次大戦との関わりを思いつくまま綴らせて頂きます。

現役を退いて最近は意識することもなく気が付いてみると鹿児島の知覧、シベリア抑留者の日本人墓地、盧溝橋の中国人民抗日戦争記念館、舞鶴の引揚記念館、昨年はアウシュビツ等を訪ねている。歐州では太平洋戦争ではなく第二次世界大戦であつたと考えさせられる機会となつた。

## 戦時体験・見聞

私は昭和一八年五月に誕生して以来、世田谷の奥沢に住んでおり、これまで生活の環境に格段の大きな変化はなかつたかもしれない。今もその近くに住んでいる。戦争の記憶と言えども、いくつかのスポット的場面がおぼろげながら浮かぶだけである。母の背中に負ぶわれて庭に掘つた防空壕に入ろうとする場面と灯火管制で天井から吊り下がつた電灯に黒い布のカバーがかけられ、食卓の所だけが仄かに照らされていた場面ぐらいである。明暗の切り換えが記憶に残りやすいのかもしれない。

終戦前は、母の実家の京都舞鶴に母と疎開していた。わざわざ軍港の舞鶴に疎開したのは、やはり実家の便宜と地域社会の助け合いを当てにしたのであらうか。その間、東京の父の中野の実家は、昭和二〇年の東京の継続的空襲に遭い焼失した。持ち出せたものは叔母が仏壇から取り出して背のうに詰めた過去帳のみであつたという。幸い死傷に遭つ者もなく、私の父母には家があつたので、祖母らはここに身を寄せ、その後祖母は一緒に暮らすことになつた。母の方では、母の兄や祖母の実家には多くの軍人の兄弟がいて中国や東南アジアに赴いた。よく聞かされたのは、祖母や祖母の母は毎日裏山に登つて神社に参拝して一心に無事を祈願し、幸い全員帰還できたということだ。祖母は日蓮宗にも深く帰依していた。そんな祖母からは、決して強要はされなかつたが信心深い生き方を示してもらつた。母の兄は戦地で大腿部に貫通銃創を負つたが、帰国後、壯健で高校の数学教師に就いて若者の教育と日本の歴史の勉強に九三歳まで没頭していた。戦火で失つた同朋への思いを胸にしまつて多くを語らずひたむきに生きていた姿を思い出す。

戦後間もなくだろうか。食料事情が厳しい中、母が一人リュックを背負つて調達している姿を記憶しているが、母の父の実家が茨城であり、随分都合をつけてもらつて比較的恵まれていたようだ。茨城の親類が来宅して家の縁側で家族と撮つた写真が残つている。栄養のためといって牛乳を買い求めて町中を母と歩きま

わったこと也有つた。東京では、国鉄の横須賀線、京浜東北線には、横浜近辺との往来のためか、進駐軍専用車として最後尾に白帯の一等車が連結されていたのを目にした。一方、駅頭では白衣姿の傷痍軍人がアコーディオンを奏でていたのちぐはぐ感を覚えた。

数年前に訪ねた南九州の知覧は、妻の親類が特攻として飛び立った所だ。美しい開聞岳に別れを告げ大空に小鳥のように舞い上がった様子と思うと何とも切なく胸が詰まつた。

### シベリア抑留

社会に出て、技術屋として現場、現物を基本とする姿勢を重視してきた。そんなことで今振り返ると第二次大戦に係る場所にも随分足を運んでいる。中央アジアのカザフスタン、モンゴルに業務や旅行で出かける機会があつた。カザフスタンでは昔の首都アルマトイのはずれにある日本人墓地に案内された。清掃もされるようだが、訪ねたのは四月末、草が生い茂り遠い異郷の町はずれに人知れず眠つているようだ。厳寒状況下で満足な食事、休養も与えられず、過酷な労働を強要されて多くの抑留者が死亡した。シベリア鉄道の支線バム（バイカル・アムール）鉄道の建設では「枕木一本に入柱が一本立つた」とまで言われたという。一九四七年から日ソ国交回復の一九五六年にかけて四七万二〇〇〇人が帰国できた。過酷な労働を強いられる一方、共産主義の教育も行われ、革命、階級闘争の思想も育てるため、兵卒や下士官に元上官を殴らせることもあつたという。武装解除した日本兵の家庭への復帰を保証したボツダム宣言に背くもので、一九九三年、エリツイン大統領訪日の一際に謝罪表明された。

何でこんなことを知らなかつたのか無性に腹が立つた。後で調べてみると、私の歴史の勉強は高校時代で停止しているのだが、当時の日本史の参考書が見つかつたのでページを繰ると、ソ連参戦以外の記述はなかつた。

た。シベリアからの帰国が一九五六六年まで続いたということは、当時はまだ真相の全貌の解明が十分でなかつたからではなかろうか。アルマティは、ヘミングウェイの妻メリーガ「世界で一番美しい街」と呼んだように、日本の緑豊かな地方都市を思い起こすような風情があり、そんな中、望郷の念を抱いて眠つてゐるのにやりきれない思いでいっぱいになる。

その後に、モンゴルを旅する機会があつたが、首都ウランバートルには、立派な日本人八三五柱の慰靈碑が花壇に彩られた美しく整備された慰靈公園にある。ここにも、壮絶な気候、過酷な生活環境の中で十分な装備も設備もないまま重労働に従事し、伝染病、寒さ、精神的ストレス等、様々な要因で祖国を想いながら力尽きた日本人の靈が祀られている。公園の小高い丘の途中にひつそりと人の丈くらいの古い石碑が立つてゐる。一九四七年、引き揚げる際に、志半ばで命を落とした同志のために日本人抑留者たちが建立したものだつた。引き揚げるときの心情を思うと何とも胸が痛む。

ある時、舞鶴引揚記念館の案内が目に留まり立ち寄つた。舞鶴港は小学時代に興安丸が引揚船として中国やナホトカからの引揚者が最初に祖国の土を踏んだ所と報じられていた。当時は、シベリアでそんなにも過酷な生活を強いられていたとは全く知らなかつた。また、新宿駅西側の住友ビルには、四八階に平和祈念展示資料館の案内があつた。ここにもシベリア抑留の展示がある。これらの資料・記念館にはシベリア抑留の想像を絶する極限状況が再現されている。戦争の不条理さに目がくらくらするいたたまれない経験をした。

さらに、ある時、黒を基調とする油絵でないと描けないと描けないような力強さをもつた一枚の絵に出会つた。抽象的であるが魂が揺さぶられるような訴える力に引き込まれた。それが何とシベリア抑留を経験した香月泰男という画家の作品だつた。その出会いに因縁的なものさえ感じた。このようにたまたままでの巡り合いによるシベリア抑留との関わりが続いている。

### 「敗北を抱きしめて」

友人から米国の歴史家、ジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』を奨められた。GHQ占領期の日本人について書かれた上下巻合せて一〇〇ページに及ぶ大作である。米国で一九九九年に刊行され、ピューリツァー賞を受賞し、訳本が出版されているが、アメリカ最高の歴史家が描く二〇世紀の叙事詩と紹介される。この著作から現行憲法成立のプロセスを引用をまじえて紹介する。

- ・「内閣の憲法調査会の起草案が国民に嘲笑われたのを機に、GHQは大胆にも秘密の“憲法制定会議”を招集した」

・「日本の委員会メンバーは、アメリカの憲法思想を支えている法的、哲学的原理をまったく把握できず、しかもそれについて尋ねることさえ拒否した」

・「アメリカ人が人民主権や人権を重視していることにはほとんど興味を抱いていなかつた」

・「マッカーサー元帥は、日本国民のために新しい憲法を起草するという歴史的な意義をもつ仕事を民政

局に委託した」

・「マッカーサーが日本の憲法に欠ぐべからざるものとした三原則は、天皇の元首の地位、封建制度は役割を終えると共に日本は自國の紛争解決のための手段としての戦争、更に自國の安全を保持する手段としの戦争さえも放棄する。日本は、その防衛と保護を、より崇高な理想に委ねる」

新憲法の作成スケジュールは一九四六年一月四日に部下が招集され、二月一二日完成でマッカーサーの承認を得るものであった。それは極東委員会の活動開始や日本側の憲法草案はGHQに提出されておらず、公式会議が迫っていたことから、わずか一週間での作成が指示された。終戦直後の空白時期に、様々なしかがらみに乱されないよう理想を追い求めたものと言えるのだろう。

- ・「まったく斬新な考え方を恐れずに日本で試してみようという人々によつて運営されたことは健全で好ましいことだつた」
- ・「理想主義的な精神、つまり抑圧を取り除き、民主主義を制度化するために、自分たちは特別な任務に就いているのだという共通の感覚」
- ・「外国の憲法を集めるためにいくつもの大学図書館を訪れた」

### 東京裁判関連で関心を持った箇所を引用する。

- ・「日本人からみれば東京裁判にソ連が列なつてゐることこそ、勝者の裁きのどんでもなく不可解などころだつた。ソビエト連邦が平和と正義のモデルだつたとは言えなかつた。ソ連は極めて明らかな偽善の罪を負つていた」
- ・「日本は神聖たるべき条約義務に違反した罪を問われたが、ソ連こそ裁く側にまわる資格を得たのは戦争の最後の週になつて日ソ中立条約を破つたからにほかならないではないか」
- ・「日本による民間人や捕虜に対する残虐行為の他に、同時に満州で赤軍が民間人を虐待していたことも知られていた」
- ・「裁判中も何十万人もの日本人捕虜が消息不明とされたままソ連に捕えられていた。ソ連で抑留されて死んだ捕虜の数が、日本の捕虜となり悲惨な死を迎えた米英連邦の捕虜よりはるかに多かつた」
- ・「アメリカに対しては、ダブルスタンダードとして、特に原爆投下は“人道に対する罪”にあたる」、「手段が目的によつて正当化されるならば、原爆使用が戦争を終わらせたとして正当である」
- ・「東京裁判でのインドのパル判事は、アジアの戦争でナチスによる虐殺に匹敵するのは、米の指導者に

する行為であつた：原爆投下は戦争法に違反していた…

・「連合国は、日本の都巾を焼き払い、原爆まで投下し、日本の指導者を裁く道徳的資格があるのか」

次第にアメリカは反共の目的の下、欺瞞的態度になつていく。

・「日本人の多くは、裁判で暴露された犯罪、暴力に狂つた世界で、このような平和と人道に対する罪を犯したのは日本だけではないだろうという認識とがないまぜになつて、敗北と共に抱いた軍国主義と戦争への嫌悪感を強くした」

・「裁判によつて、平和と正義がいかに脆いかが明らかにされたからこそ、それを大切にすることが一層重要になつた。その理想を不動にしているのが新憲法の『戦争放棄』の規定であることは言うまでもない」

このように見てくると、戦争は社会を混沌とした秩序のない不条理な世界へ導くのであり、正義を大切にする人類の存在を否定することにしかならない。

元オースロ国際平和研究所長のヨハン・ガルトウングという専門家は、日本は九条を「安眠まくら」にしている。「安眠まくら」はもはや存在しないことを自覚すべきだと言つている。憲法九条、不戦条約に対しては、時代の変遷に正面から向き合い、その精神、理念を貫き通す諸々の方策を絶えず具体的に明示、共有すべきことへの警鐘を鳴らし続けることが重要なのだろう。

### わが歩み——核兵器廃絶への思い

小学校四、五年の頃、東京での小規模な広島原爆展に連れて行かれ、写真や遺品等が無造作に並んでいた

のを見て、衝撃的な悲惨さに後ずさりするような背走感を覚えたのを記憶している。中学に入ると水戸に単身赴任していた父に連れられて東海村の原子力研究所の我が国初の原子炉JRR-1を見学し、原子力の平和利用への昂揚を覚え、高校時代には教育テレビでの初代科学アタッシェとして米国に滞在し、帰国された向坊隆先生（東大助教授）の話で、核分裂連鎖反応の新鮮さと共に原子力発電といつても高圧蒸気を作るだけかと落胆したようだ。そんな中、いつしか原子力進学の入り口に導かれていた。

原子力の利用研究は、米国の原爆開発のマンハッタン計画からスタートし、一九五三年にアイゼンハワー米大統領による国連での演説「平和のための原子力」により平和利用の道と共に軍事利用を防ぐしきみを確立する提案がなされた。ここで、原子力平和利用のパンドラの箱が開けられた訳だ。一九七〇年には核拡散防止条約（NPT）が締結され、核兵器保有国を五ヶ国（米、ソ、英、仏、中）に限定して、それ以外には核兵器を禁ずる条約で、不平等、差別的であるが、これ以上核兵器保有を増やさない点で実効性がある。インドは最大のライバル中国の核実験成功に対抗し核武装に踏み切つた。国連は核兵器の使用などの違法性について国際司法裁判所に見解を仰ぎ、裁判長（アルジェリア出身）は、一九九六年に「核兵器の使用などは人道法違反」であると決定した。しかし、それには勧告的意見が添えられ下記二項が併記された。

- ①核兵器の使用などは一般的に人道法違反である
- ②国家存立に関わる自衛の極限状況では合法か違法か判断できない

文民は標的にしない、兵士に不必要的苦痛を与えてはならないという国際人道法上からは核使用などの違法性は高い。一方、国際法は国家の自衛権を認めてるので矛盾しているが、解決には核廃絶しかない。唯一の原爆被爆国である日本は、核兵器廃絶のリーダーとなり、「核兵器は国際法違反」とし、核廃絶実現へのプロセスを明示する努力をすべきだろう。

世界では、平和利用の名の下に軍事利用を計画していると懸念されている国も含め様々な国がある中、核廃絶は容易ではない。我が国は世界の原子力平和利用の枠組構築に貢献し、軍事利用への道を狭めていくことが現実的な道である。原子力の秘めた力を活かすよう育てていくことを夢見て、原子力研究開発に身を投じた以上、軍事利用を遠ざける道を太くしていく原子力エネルギー利用の姿を構築していくことに些かでも寄与できたらと願っている。それが核兵器廃絶につながっていくことを信じて。

## 貧しかつた子供の頃

横澤 喜久子

### 「共生」を願つて

私は戦後の我が家の状況、当時の生活暮らしぶりを思い返してみることにします。戦後の日本中が困窮していた頃の記憶、子どもの当時にはその生活が当たり前と思つて受け入れ、日々を過ごしてきましたが、そうした生活状況を今の若い世代はもちろん、わが子たちも想像すらできないと思います。同世代の方々には誰も経験してきた生活ばかりとは思いますが、次世代の方々に知つておいてほしいと私も書いてみることにしました。

日本は戦争によつて負け、全てが破壊され、我が家でも食べるもの、着るものも不足し、貧しい子ども時代を過ごしました。日本中が栄養失調、我が家でも子ども五人分の何もかもが母の手づくり、親は食べずに何でも分け合つて過ごしました。私は幼いながら、我が家は貧乏だからモノをほしがつてはいけないと思つていました。両親が必死になつて子どもを守り、育ててくれたことは肌で感じています。我が家族の父は七四歳で二五年前に亡くなりましたが、母は今年で一〇〇歳、五人の兄弟姉妹は七八歳一六八歳と皆、大きな病気もせずに、無事に生き抜いています。戦争の悲惨さを私はまだ幼く、あまり記憶にはありませんが、多くの人々が経験してきた、身近に多く見ってきたことを記してみます。

戦後七〇年、敗戦したことによつて日本は戦争放棄してきました。そのお陰でこれまで戦いには加わらず、平和に生きてこれたことに感謝すると同時に、さらに、これから世代もずっと悲惨な戦争を起さないよう、それぞれが真剣に考え、行動していくかなくてはと思います。私はこれまで健康・運動科学の分野を専門とし、主に運動生理学面からいのちを守り、ひとりひとりの持つて生まれた力を引き出していきたいと考えてきました。

しかし、こうした専門分野でどんなに深め、進めてみても、大本となる全ての破壊をもたらす戦争が起るような状況になつたら全くの意味のないことです。まず一番に誰ものいのちを大事にし、これまでの七〇年間のように、誰もが二度と悲惨な戦争には加わらないようにと願うばかりです。人類はいつの時代にも、どこでも争い、戦いを起こしそうなのです。しかし、どんな状況にあっても、理性と話し合いで止めていくのが人間のなすべきことだと思います。強くなること、一番になることを追うのでなく、何としても「共生」です。一人ひとり皆、違うのです。そのため私たちは多くを学び、知性を磨き、違いを認め、誰もが共存し、幸せな一生を過ごせることを求めて生きているのです。世界中が危うい状況になつてゐる今、一人ひとりのいのちを守り、平穏な日々を過ごしていくことのできるように、より一層、平和の尊さを知り、絶対に戦争を起さないように皆で積極的に声を上げ、伝えていくことが大事に思います。

### 敗戦後の生活

敗戦後の私が生きてきた生活環境を思い出します。戦争による多くの悲惨なことがありました。七〇年前、私の住んでいた東京（新宿区下落合）でも多く家々が燃え、大事なひと、モノ、財産を失い、文化歴史も多く破壊され、焼き出されたのだそうです。戦争によつて多くのいのちを奪われ、級友の中にもお父

様、ご家族がなくなつた方、さらには、浮浪児と呼ばれる子も多くいて、街にはヤミ商売、インチキ商売、盗み、自殺、病氣といった生活苦、多くの暗い出来事が日常的にありました。戦後しばらくは新宿、池袋といった駅の近くには傷痍軍人、手を失つた、脚を失つた人々が白衣姿、戦闘帽、松葉づえで、アコーディオンを弾いて（なぜ、多くの傷痍軍人さんがアコーディオンを弾けたのか、今になつて不思議に思います）募金を乞う姿が多く見られました。

ラジオからは毎日「尋ね人の時間」が放送され、家族の消息を探していました。長い間、舞鶴港から引揚者の帰国ニュースが放送されていました。また、私の家の近くの駅には夕方にいつも真っ白な衣に兵隊さんの帽子、下駄履き姿の眞面目そうで、暗い感じのおじさんが毎日、毎日ヴァイオリンを弾いていました。戦争で頭がおかしくなつたのだと噂され、子供ながらに心配で、怖かつたことを思い出します。戦争で多くの人々の生活が壊され、皆、貧しくなつてしまつたのです。

我が家は両親ともに東京育ちで田舎はありませんでした。実家（新宿区下落合）のあたりも空襲で危なくなり、戦況があやしく、私の出産間近の一年間だけ畑の多かつた世田谷経堂に疎開、私はそこの家で生まれたといいます。ますます、東京が危くなり、長姉（小学校三年生）、次姉（小学校一年生）は学童疎開で長野県の湯田中に疎開したとのことです。子どもの頃、疎開先からの幼い姉たちから手紙、「日本が勝つまでは」と頑張つている様子の手紙を何通か見つけ、泣いた覚えがあります。小学校一年、三年生の子供が疎開先で食べ物もしつかり食べられず、ガリガリに痩せててしまい、親を恋しく、我慢、我慢の日々であつたようです。

く大空襲を受け、その大半が廃墟に帰したといいます。実家のあつた日白文化村一帯（下落合）の空襲は、一九四五四年四月一三〇夜から一四日明け方であつたといいます。B29来襲の警報が鳴り、激しく焼夷弾が集中攻撃、下落合から日白駅まで一面、その空襲で焼け野原に化したといいます。記録によれば、第一から第五ある日白文化村では半数以上の家屋が焼失し、多くの人が焼け出され、焼夷弾が落ちた第一文化村では五十何軒かのうち焼け残つたのはたつたの四軒といわれます。実家のある第二文化村では、幸いにも我が家のある一区画だけが焼けず、僅かに残つたのです（都市叢書 日白文化村 日本経済評論社より）。

その焼夷弾による集中攻撃、空襲の最中に出来事です。我が家では三歳前後の幼い兄が「おしつこ!!おしつこ!!」と叫び、やむを得ず、母が幼い兄をトイレに連れて行つた間に、我が家にもストーンと、それまで母と兄が坐つていた座布団の上に不発弾が屋根を突き破つて落ちたといふのです。まだ二〇代の若かつた母も幼い兄もトイレに立たなければ、あの時に二人は死んでしまつたかも知れないと聞いています。母はその後ちてきた焼夷弾のかけらをずっと大事に保管し、見せてくれたことがあります。鉄の塊のようなものでした。その空襲で実家の近所は道路一本先まで丸焼けになつてしまつたようです。当時、こうした状況でひとのいのちは一瞬にして消される状況だつたのです。大切なのちも脆いものなのです。その後、焼け出された級友も一時、自宅の駐車場やバラック小屋に暮らしていたという記憶があります。

### スイトン、ヤミ

戦後、我が家にも食べるものが不足していたことは幼いながら記憶にあります。私の原風景はお茶の間で卓袱台の回りを五人の子供が取り囲み、「一二歳の私が立ちあがつていて「スイトーンー！スイトーンー！」と喜んでいる姿かもしれません。我が家は子ども五人を抱え、当時、家族七人を食べさせていくことはさぞ大

変だつたと思います。戦争中、お米を始め、多くの食物、全てが不足し、ヤミで手に入れる。赤子であつた私を背負つて、母の持つていた着物を練馬（大泉のあたり）の農家に行つては、お米、農作物に換えてもらつた、途中、警官にお米を没収されそつて必死だつたとよく聞かされました。きっと多くの家庭がそのような暮らしであつたのでしよう。米穀通帳による配給米、食料品等では全く足りず、戦後もご近所の家でヤミ米を分けていただいていく、私も使いに行つたことをよく覚えています。庭にわざか二羽の鶏を飼い、朝にすぐに卵をとりました。ひとつ卵を子ども二人に分けて、ご飯に生卵を混ぜてかけて食べるのですが、分ける時に白身が多くなるか、黄身が多くなるかは子どものとつては大問題、じつと分けてくれるのを見守り続けたものです。我が家では何でも正確に五つに分けなくてはならず大変なことでした（年齢差があつたにもかかわらず、五等分でした）。お金もなく、さらにお金を出してもモノがないのです。

### 二部授業

公立の小学校も大変だつたようです。窓ガラスにバッテンに白い紙が貼られた学校の窓は多くが割れ、（爆音でガラスが飛び散るのを防ぐためだつたといふ）危険な状態だつたそうです。疎開から戻つた一人の姉たちは近くの小学校があまりに荒れはて、危険な状態であつたので、遠く離れた私立の付属小学校歩いて通うようになつたと聞いています。徐々に、学校も復旧し、兄、私、弟は近くの区立小学校に入学しました。私が入学した頃は小学校の一部を近所の中学校が使い、教室が足りず朝行き、早く帰宅するクラスとお昼近くに登校するというクラスという二部授業でした。

焼け残つた自宅の回りのお宅の中には進駐軍関係の住まいに借りられ、外人家族が住むようになりました。何も分かつていなかい私達、子どもはそこに出入りするMPからのガム、チョコレート、ケーキ、コカコーカー

ラ……等を珍しがり、英語を面白がって、喜んでいたものです。貧しい日本人の生活と比べ、テレビ、大きな冷蔵庫、車があり、P Xという進駐軍基地内のマーケットには夢のような世界があつたことに驚いていたものです。日本中が栄養失調、不衛生状態になりました。G H Qによるノミ、シラミ撲滅作戦、アメリカのM Pが各家庭にまわり、D D Tを撒いて、(私は隠れ、無事でした) 近所の子供たちの坊主頭が真っ白けになつたことを覚えてています。

### 脱脂粉乳

日本中が栄養失調、子供たちに栄養をとらせるために学校給食が始まります。まずは一年生の時、週一回、水曜日だけ金色のアルマイトのコップを家から持つていき、脱脂粉乳が配られました。何も知らず、惨めな、つらい思いもせず、私はなんか焦げ臭いような脱脂粉乳をいやがらず飲んでいました。

脱脂粉乳を調べてみると「保存性がよく、蛋白質、カルシウム、乳糖などを多く含んでおり、栄養価が高いことから、戦後しばらく学校給食に用いられた。学校給食に用いられたのは主にユニセフからの援助品である。戦後間もない頃の日本の食糧事情を知ったアメリカ合衆国の市民団体が、日本の子供たちの為に実行した支援だった。保存性や栄養価などを評価されることが多いが、当時の学校給食で用いられた脱脂粉乳の味を知っている者(団塊の世代など)には、これが美味しかったという評は皆無に近い。特に臭いが酷かつたといわれるが、これは、当時学校給食に供されたものは、バターを作った残りの廃棄物で畜産の飼料用として粗雑に扱われたものだからで、また無蓋貨物船でパナマ運河を経由した為に、高温と多湿で傷んだからという説もある」とあります。

そのうち、月曜日から金曜日までの給食が始まり、工夫され、ちょっとしたおかげ、コッペパンにマーベ

リンのついた給食を食べるようになりました。日本の学校給食はこうした食糧事情の中から生まれたようです。私は通っていた公立の小学校の級友の中にはその給食の一部を「家に待っている妹、弟に」とそつと持ち帰る子がいました。家が焼かれ、バラック小屋から通う子、赤ちゃんを背負つて、通っている子もいました。小学校の近くには戦争で両親を亡くした子供のための施設があり、クラスの中に何人か通っていました。私は時々、そこから通う友人に誘われ、遊びに行つことがあります。当時は何も思わず、一部屋に数人の子ども達がいて、各にお小遣いの代わりに寮姉さんからノート、鉛筆、お菓子といった券を配られて、小さいながら皆がしっかりと生活し、びっくりしました。今、思うと本当に大変な状況だったのです。親を亡くした子どもたちはそうした施設から学校に通つていたのです。戦争によつて家族を失い、ひとりひとりのいのち、生活を奪われてしまつた人々が多く出たのです。

### いのちの大切さ

日本社会では必死になつて復興に動き、今ではそうした悲惨な生活も忘れ去られそうに戦後七〇年を迎えます。私たちの世代は当たり前と思つてきた最も大事ないのちの尊さを次世代に伝えず、これまで忙しい生活の中でないがしろにしてきたのかもしれません。この年月中、人間がつくり出してきた機械化、科学技術等によつて、効率よく、便利にさせてきた生活の中で、日本中が大事なもの忘れてきてしまつた気がします。何としても一番大事なことは一人ひとりのいのちです。授かったそれぞれのいのちはどんなに長くても百年です。ひとりひとりのいのちを生かし、全うできる世の中を受け継いでいくことが一番に大事なのではないでしょうか。

# いま、父を思えば

横山 友子

## 軍隊が変えた父の人格

「お父さんは、戦争から帰つて来たら、人が變つてしまつていたのよ。」私が小学生のころ、夫婦の諍いで夫に殴られた後、傍にいた子どもたちに母はよくそう言つていました。

父は千葉県の農家の長男だったので、八〇年前のその時代には「家を継ぐ」のが当然とされていたものの、勉強が好きだったので上京し働きながら学校に行かせてもらつたそうです。父の母親である私の祖母にしてみれば、市会議員をし、妻妾を持ち、麴製造と農家の家業一切を自分の肩に背負わせている夫への意地だったのかも知れません。

子どもの時から「専門オタク」だつたらしい父は、中学生の時に自分で夜空の星を観察したくて天体望遠鏡を自作したと言つていました。昭和の初めの資材の乏しい時代に、何処から知識や材料を得たのかなど、色々と訊いておけばよかつたと今更ながら後悔しています。

学校では物理学を選びカメラ製造会社に就職した後、学友の妹である母と結婚し、一九四三年に二女の私が生まれてすぐにインドネシアのスマトラ島へと出征したこと。「本来ならば理系の人間は赤紙が来ない筈だったのに、何処かで何かの手違いがあつたらしい」と父母はその後語つていましたが本当のところは

不明です。

オタク人間で、周りの状況を把握する能力が弱かつたらしい父は、軍隊の中では「天皇陛下から賜つた」物品を仲間の兵隊から盗まれたり、動作が遅いことを理由に、日常的に暴力の対象になつていたらしいのです。

育つた家庭環境に加えて、成長期の関心はもつぱら理系の内容であつたということもあつてなのか、父は三〇歳といえども、年齢相応の心の成長・成熟が乏しかつたと私は想像しています（残念ながら、これは私の知る限りの何歳の父にも該当してしまいます…）。そんな人間が、戦場には出なくて済んだとは言え一年以上、軍隊という組織に組み込まれていたら、母の言うように「人が変わってしまう」ことも大いにありうるのかもしれません。以前は穏やかに話し合えたのに、戦争後は、すぐに激昂し暴力をふるうようになつた」と母はとても嘆いていました。

四〇歳ころより「そうちつ病」になり、その後の十数年間は、精神面や経済面などで、四人の家族それがいろいろな影響を被りました。今思うと、父は、人としての精神面が脆弱で未成長であつたのに、戦争という過酷な状況に置かれたために、発達の順を踏むことが出来ずに歪んだ人格になつてしまつたのかもしれません。戦争が無くて、普通の穏やかな時間を重ねていられたならば、それなりの人になれたのではないか、とも思うと、恨みを持ち、心通わす話をしてこなかつたことが、今となつてはとても悔やまれます。

## 叔父たちのこと

一方、母の弟である私の叔父は、近衛の騎兵からフィリピンに移動させられた時に、検温時にこつそりと乾布摩擦をして体温を高く偽り、その結果、仮病の演出が功を奏し日本へ帰つて来られたとのこと（何かの

小説にもこの話はあつた気がします）。私が中学生の時に、友人から「父親は、南の島で戦死した…」と聞いた時、「不条理」という言葉は知らずとも、そんな思いになりました。「不条理」はもつともっと大きなところに存在していたのに、身近なところではすぐ感じ取れるものです。

もう一人の叔父は一八歳の時、秋田で学徒動員されて秋田山中の「尾去沢鉱山」で溶鉱炉の煙突作りのため煉瓦運びに従事したそうで、七年ほど前に一緒に旅行した際にその鉱山跡を訪ねてみました。煙突のあった場所は、今は、すっかり荒れ果てて、私たちには、ただの山中の空き地にしか見えませんでしたが、やはりそこで過ごした叔父には昔の光景が蘇り、ちょっとした構造物の跡を見付けては感慨に浸っていました。自分たちは学生だったのでそれなりの待遇を受けて、仕事後は宿舎の二階で休むことが許されたそうです。しかし、外を眺めていたら、夕暮れになると毎日のように戸板に乗せられた人が運ばれて行つたので、ある時、数人でつそりと見に行つたら、そこには「徵用された朝鮮人」が死後に捨てられている穴があつたと言葉少なに語つてくれました。

いま、日本軍「慰安婦」が国際的にも大きく問題視されています。この「徵用された朝鮮人」と同様に「その人たちをどう扱つて来たのか」がまず問われるべき事柄ですのに、「集め方」ばかりに焦点を合わせ問題の本質をすらし、ぽかしている卑劣さに怒りを覚えます。

私たちの年代の人たちが経験した生活上の困難：親を失うこと・食糧不足・貧困・家庭環境の歪み・住宅環境などの悪さ、等など…は、親たちが経験したあの戦争に殆ど起因していますし、それを必死で乗り越えて家族を守る親の姿を見て私たちは育つて来ました。しかし、今の若者が置かれている困難…就労条件の悪さ・経済見通しの暗さ・原発などの環境問題・子育ての問題、等など…の原因の多くが、私たちが享受してきた経済発展と、そこにばかり価値を置いて来た私たちの生活、少数の人が必死に指摘してきた種々の問題

に対する無関心や意識の低さ、なのだと思います。今、七〇歳を過ぎ、ようやくいろいろな柵が無くなり来し方を振り返る余裕が出来ました。これからを生きる人たちに伝えたい色々な思いは沢山あるのですが、いまま、それを伝える難しさを感じています。

# そつと忍びよる戦争

和多田 雅子

## 傷痍軍人

一九四三年七月生まれの私。改めて「戦争の記憶」をたぐってみて、とてもあいまいでおぼろげな、しかも断片的な「戦後の風景」しか記憶していないことに気がつきました。

わが家の近所に割れたガラス戸を紙で張り合わせたままにしている家があり、焼夷弾のかけらが当たったのだと聞かされたこと。しばらくの間お米を買うのに米穀通帳が必要だったこと。電車のシートがボロボロで、中から綿がはみだしていたこと。埃と土まみれの服をまといはだしのままフラフラ歩いている浮浪児（両親も家もなくして放浪している子どもを当時そう呼んでいた）と道ですれちがつたとき、そのあまりにすさまじい姿にかわいそうという気持ちはふきどんで、ただただ感じた恐怖心…など。

そうしたなかで、もつとも強烈に脳理に焼きついているのが、白装束でアコードィオンを弾いていた傷痍軍人の姿です。

街角や電車、バスの中などでしばしば見かけたのですが、その人の箱にお金を入れる人、見てみぬふりをする人などさまざまな大人たちの姿も記憶に残っています。

あるとき電車のなかで両手の肘から先と片足をなくした白装束の人が床にころがるようにしていの姿を見

たときは、息が詰まるほどの恐怖をおぼえ、それがしばらくトラウマになつたほど。物心ついてきた私にとつては受け止めがたいほどのむごたらしさでした。

どうしてそんなことをしているのか、どうしてそんなことになつたのかもわからないまま、時間がたつていきました。そしていつか、めつたに思い出すこともない戦後の暗い風景のひとつとなつていきました。

## 「忘れられた皇軍」

後年、大島渚監督の「忘れられた皇軍」というドキュメンタリを見て、あの白装束の人たちの多くが、日本人として徴兵され戦傷を負つて戻ってきた在日韓国・朝鮮人であることを知りました。一九五一年のサンフランシスコ講和条約発効とともに一方的に日本国籍を剥奪され、日本人の元兵士には与えられた軍人恩給を受けられず、まったく生活がなりたくなつていたということです。何も知らないまま恐怖心ばかりをつのらせていた自分を恥じるしかありませんでした。

改めて胸がつぶれるような思いでした。なんという理不尽さ…日本という国の本質を思い知りました。

大島監督の「日本人たより、私たちはこれでいいのだろうか？ これでいいのだろうか？」というナレーションが胸に突き刺さりました。

## ひな人形

もう一つ「戦争」をイメージする記憶があります。

毎年三月に、ひな人形を飾りながら母が語つたこと。

【注文】していた人形店から、材料がなくて作れませんと断られて、忍おばさん（父の妹）が一日間屋街を

歩いて、やつと見つけてくれたのがこの「おひなさまなのよ」と。

その話を聞くたび、幼い私は一回中街を歩いてひな人形を見つけてくれた叔母の姿を思い描いていました。しかし年を経て私は、「一九四四年三月ころにはひな人形をつくる材料がなくなっていた、日本はそういう状況だった」という事実が気になつてきました。

ある日ひな人形をつくる材料がなくなつていた…というように、じわじわと少しずつ変化していく戦時下の庶民の生活。それは一つもう一つと徐々に日常生活を剥ぎ取られていくようなものだったのではないか、と想像します。

そしてそれが、私たちがしばしば目にしてきた戦中・戦後の食糧難の悲惨な状況につながつていったのではないか、と。

戦争は一気にやつてくるのではなく、目に見えないかたちでそつと忍び寄つてくる…そのことが、いつそう恐ろしいと感じられるようになりました（それは今現在、政権が強引にすすめていることへの不安感と重なります）。

ある資料で、東京で第二次世界大戦下、戦火にみまわれなかつた家は二十数パーセント、と読んだ記憶があります（この数字は定かではありませんが）。

東京のはずれ世田谷のわが家が戦火をまぬがれたのも、そしてひな人形が残つたのも、ほんの偶然にすぎなかつたということです。

## 私の戦後史

和田 正武

### 父の戦死と家族の離別

戦後七〇年、戦争について、次の世代に何を書いて残すべきか、迷いましたが、結局、私の個人的生活環境をありのまま書く以外ないかな、と思います。これを書いていて、母や伯父や伯母からもつといろいろの事を聞いておけばよかつたという思いが強くなりましたが、それぞれのつらい戦争体験は自分限りの事として、あえて他の人に話すことではない、と考えていたのでしょうか。ただ、そうしたつらい個人的体験や思い出を残すことが、今求められていることかもしれません。そこで以下に、一庶民が戦後生きてきた中で、戦争の事をどのように感じていたか、思い出を書かせていただきます。

私は昭和一九年一月に、職業軍人の次男として生まれました。父は昭和二〇年九月、中国山西省で、在留邦人の日本への帰還作戦に携わり、事故で亡くなりました。あとには、二歳年上の兄と私とまだ若い母が残されました。父は結局一度も私を見る事はありませんでした。母は、疎開先の茨城県水戸市で、父の訃報を受けとりました。すでに終戦しており、無事帰つてくると信じていたこともあり、母の嘆きは、はたから見ていられないほど大きかったと聞いています。私は父の死によって母の実家（祖父母）に引き取られ、養子となり、母と兄とは別れて暮らすことになりました。母と兄は、東京で、伯母の家族と一緒に暮らし、私は、

水戸で祖父母に引き取られました。水戸には、別の伯母家族がおり、夫は元軍医で、公職追放で国立病院を離職、病院を開業していました。そこには従兄姉妹がおり、よく遊びに行きました。母や兄とは、年に一、二回、水戸で、あるいは東京で夏休みや春休みに会うことがあるという状況で、むしろ水戸の従兄姉妹たちが実の兄姉妹のようでした。一方、父の実家は富山で、なかなか行く機会が無い状況でした。父方の伯母家族は、夫が満州（現在中国では偽滿州国と呼ばれます）の関東局の高官だったこともあり戦時中は満州の新京（現在の吉林省長春）で暮らしていましたが、戦後の混乱期に帰還。満州で一人、引き揚げ中に朝鮮で一人、計三人の子供（私にとっての従兄弟姉）を失っています。

私は小学校五年まで水戸で過ごしました。水戸も空襲に会いましたが、幸い母の実家は焼け残っており、そこで、祖父母と、そして小学校一年の時祖父が亡くなり、それからは祖母と二人で暮らすこととなりました。その当時の思い出としては、隣の家は広い庭を持つ大きな洋館で、進駐軍に接收されアメリカの軍人家族が住んでいたこと。そして板塀を境に、華やかな気配が感じられ、此方は大きな声を出したりすることを遠慮して、ひそひそと暮らしていたことなどを思い出します。一方道路を挟んで向かいの家は満州から帰還した大工さん一家が住んでおり、子供が多く、一緒に鬼ごっこや、陣取り合戦で彼らと遊んだこと。貧しい家でしたが、満州風のオンドル（床下暖房）が作られ、冬など暖かい床に寝転んだり、満州風の鍋料理をつついたり、自分の家のように出入りしていました。また、道路に面して仕事場があり、小父さんがカンナ掛けをしたり、大きなのこぎりで木材を切る作業を、しゃがみこんで、飽きずいつまでも眺めていたものでした。終戦後の皆貧しい時代、なにかと助け合って生きしていくことが自然に行われていました。そういう意味では、母、兄と別れての暮らしも、それほど寂しいとは思わなかつたようです。

### 母の再婚

当時の小学校では、クラスには必ず何人か父親を亡くした子がいました。自分も含め、そうした子供たちは、親戚に引き取られ、母親と離れて暮らす子も見られました。当時、自活して子供を育てられる母親は決して多くはありません。また再婚しようとしても、多くの若い男性が戦死し、再婚は難しいということもありました。結局、親戚に助けられ生きていくことが多かつたのです。なお、いざ再婚となつても、子供の扱いをどうするかは問題で、母親の再婚で複雑な環境にいる子も多かつたように思います。私の母は、一〇年ほどして、シベリアから帰った、娘を持つ医者と一緒にになりました。母は、兄を伯母に預け、義理の父、娘と一緒に暮らすことになりました。その後、高校の時祖母が東京泊江に家を建て、そこに母と兄、私が移り、父は時々来るという不自然な生活が続けられました。こうして、家庭環境はさらに複雑になりました。今自分ならこうした環境を十分理解したでしようが、当時はそのことが良く解らず、義理の父、姉との関係は必ずしも良好というわけではありませんでした。今から考えると、義理の父、姉からシベリア抑留のことなど、もつと聞いておけばよかつた、と思います。

### 悲しい初恋

小学校時代の記憶として、少し甘酸っぱいことがあります。小学校四年の時でした。同じクラスに、あまり周りの子と遊ばない静かな女の子がいました。自分には何故か気になる子でした。当時の小学校では、学校でウサギや鶏をみんなで世話をして飼うということが授業の一環でやられていました。鶏は、雌から育てて、親鳥になつたら卵を産ませ、ゆで卵にしてみんなで順番に食べる、というものでした。男女一組で、毎日順番で世話当番となります。たまたま、彼女と組むこととなり、私が鳥にとても関心があつたこともあります

ますが、二人で良く世話をしました。他のクラスの子たちはだんだん鶏の世話に飽きてきて、結局、我々二人で世話をすることとなりました。何かを一人ですることが楽しかったのです。羽虫がたかつたり、糞つまりになつたりと、いろいろなことがありながらようやく卵を産む段になりました。その頃には、「卵を産んだら一緒にたべられるといいね」といった話をするようになりました。また、私が家の庭で転んで手首を骨折し、ギブスをはめることになった時、彼女は教室で、教科書やノートを机に出したり、鉛筆を削つたりと、積極的に面倒を見てくれたこともありました。その頃には、彼女には父親がおらず母親と二人暮らし、此方も祖母と二人暮らしという境遇が似ていることを知ることになりました、お互いどこか仲間意識が湧いていたのかかもしれません。

ところが、鶏が卵を産み始めてしばらくし、まだ我々の食べる順番が回つてこないとき、急に彼女から、群馬県の桐生に引っ越すことになつたと聞かされました。母親が再婚、彼女は桐生の親戚に引き取られることになつたというのです。一人にはこの思いがけない事態はどうしようもないことでした。一緒に鶏を育て、一緒にゆで卵を食べよう、と言つていたのに、それができなくなつたこと。そして二人は、確かにお互い好きだったはずですが、そのことを告白することもなく、彼女は転校してきました。今も、桐生という名前を聞くと、自分にはなにか特別な土地という感じで、彼女はその後どうしたかな、と思います。当時の自分には、与えられた悲しい運命を受け入れる以外ない、ということだったのでしょうか。

### 童話「ゆで卵」

だいぶ後の事ですが、高校生の時の国語の先生の影響で、小説の読み方を学び、自分でも小説を書きたいと思うようになりました。そして、その思いは、大学を卒業してからもつづき、思いつくまま文章を書いて

いました。通産省に就職してイギリスに留学する機会があり、その時良く英語の童話を読んでいたこともあります。自分の小学生時代の体験を「ゆで卵」という童話にしてみました。この童話では、戦争で父を亡くした二人の男女の小学生が、一緒に鶏を育て、次第に自分たちの境遇を乗り越え仲良くなつてくこと、しかし、急に女の子は母の再婚で、親戚に預けられ、転校を余儀なくされることがあらすじです。そして結末には、彼女が汽車で桐生に向かうとき、男の子が生みたての卵をゆでて、駅まで駆けつけて彼女に渡す、というシーンを入れています。その卵は大きく、思いがけず双子の卵で、一人で一緒に食べることができました。また、その後、しばらくして彼女から手紙が来て、そこには桐生で元気で新しい生活を始めていること、また父親のインドネシアからの母宛の手紙を母から渡され、そこで、父は死を覚悟し、母には再婚しこれからの自分の人生をしっかりと生きてほしい、そして娘にもそのことを伝えてほしいと書かれていたことを知つたこと。そして、彼女は、自分は母の生き方を理解しなければならないと思う、と書かれていました。それを読んだ男の子は、戦争というものが、それが終わつた後も残された人たちに、受け入れざるを得ない暗い影を落としていることを感じさせた、としています。

今考えてみると、この童話は決して積極的に反戦を主張しているものではなく、むしろ、与えられた運命を受け入れ、その上で生きていかざるを得ない多くの人がいることを言つたのでしょうか。

この童話は、他の作品と一緒に童話集として自家出版し、たまたま小学校の先生をして友人に見せたら、授業で読んでくれたということでした。

### 大学から通産省へ

小学校五年を終え、祖母と離れ東京に移りました。教育の事もあって、東京に住むことが良いと考えられ

たからのようにです。東京では、中学を終えるまでは伯母の家に、母、兄も一緒に同居。母は途中で、再婚、義理の父と娘と住むことになり、兄、私は別居。高校の時、祖母が柏江に家を建て引っ越し、母、兄、私と暮らすことになりました。そして時々義理の父も現れました。柏江には一時水戸の従兄も東京の大学をめざし同居。ともかく、考えてみれば、不思議な家庭環境ですが、母方の伯母たちには、常に本当の息子のように扱つてもらひ、経済的にも助けられ、無事成長することができました。伯母や義理の伯父たちには感謝しきりません。

大学時代の思い出としては、奈良に入りびたり。そこで、茨城県日立出身で奈良教育大の美術史専攻の学生と知り合い、一緒に古墳めぐりや寺社、仏像めぐりをし、いろいろ教えてもらいました。彼は私より三つ年上ですが、同じ茨城出身ということと、彼の父親は海軍の軍人で、フィリピン沖で戦死という境遇の類似性が、どこか気を許すところがあつたのでしょう。ほどなく、最も信頼できる友人となりました。彼は、茨城から遠く離れた奈良で自活しながら、日本の仏教美術を研究。ともかく、実践主義。どこへでも出かけ、実物を見ることに徹していました。彼は、その後中学校の社会科の先生になり、豊富な課外教育など実体験させる教育方式をとり、また使用する教材への工夫を怠らず、その努力は素晴らしいものでした。その後、海外経験をしないと現代社会は教えられない、アルゼンチンの日本人学校へ教師として赴任。現地で、教材資料収集の旅行中に事故に会い死亡しました。生徒に、社会の仕組みを実践的に教えてきた彼の死は何とも無残なことです。あとには、若い妻と幼い二人の娘を残し、残念だったと思います。

通産省の仕事は、戦後復興から高度経済成長の時代。日本経済の競争力強化を図るため、特に欧米に対する技術格差、経済活動の実態を分析し、そこから自分なりの政策を提案、実施していくことは、とてもやりがいのあることでした。この間、特に「戦争」というテーマを考えたことはありませんが、むしろ、

日米貿易摩擦、石油危機など経済活動をベースにした国家間の利害の対立、国際紛争の実態ということを垣間見た、ということでしょうか？ 我々の生活の基盤である経済は、いつの時代でも国際紛争の原因になるということでしょう。平和の維持ということのむずかしさを知らされたことでした。

## ポーランド

通産省を退職後、帝京大学へ勤務、その傍ら産業政策アドバイザーの仕事でポーランドに三年間駐在する機会を与えられました。この経験は、日本以外の国の、戦争に関連する歴史の現実を日本と比較して考える機会でした。一九世紀初め、オーストリア、プロシア、ロシアという強国にかこまれ領土を三分割され独立を失い、その後の独立への戦い、第一次大戦後ようやく独立を取り戻しますが、再び、第二次大戦では、ドイツに侵攻され過酷な支配下に入り、ユダヤ人虐殺も含め多くの人が犠牲になりました。その後ナチスの力が衰え、独ソ間で激しい戦闘がフルシャワで起こり、フルシャワの市街地はことごとく破壊。最終的にソ連によつて解放されることになりますが、ここでも多大な人的被害をこうむります。そして、今度はソ連の共産主義体制の支配下に入り、戦後の復興への努力が始まります。ただ、社会主義体制下の自由の無い生活への不満から一九八〇年代初めに自由化運動がおこり、戒厳令下もひそかに運動は続き、それは世界の社会主義体制崩壊に大きな影響をあたえることになりました。私がポーランドに赴任したのは、社会主義体制が崩壊し、八九年たち、新たな体制建設への調整で苦労している時期で、厳しい現実を実感することができます。ソ連圏からの離脱とEUへの加盟を進める中で、経済的にはEUに飲み込まれて経済の自立性を失つていく現実。経済活動は活発に見えても、自由主義経済の導入により広がる経技術格差、地域格差。大量の若き人々の国外流出。一九世紀の国土分割以来の、激しい歴史の変化のたびに多くの悲惨な経験をしたポーランド

ドでは、個人体験というより民族としての歴史的戦争体験の人々を考へさせられることとなりました。なお、ナチズムによるユダヤ人、その他の民族への虐殺という過去の行為を含めたドイツの戦後処理の仕方について、日本との違いを考えさせられたことでした。

### 「大地の子」

その後、帝京大学では、又、思いがけない経験をすることになります。一〇年ほど前から、大学院で講義を持つようになり、その生徒のほとんどが、中国からの留学生、しかも、東北地方（旧満州）出身が多いこと。その後留学生の論文指導のためたびたび中国に行く機会があり、図らずも、父方の伯母家族が住んでいた吉林省の多くの地域を訪ねる機会を持つことになりました。今では、教え子は中国各地で活躍しており、父が戦死した山西省出身の留学生もいます。その後、中国との共同研究プロジェクトを立ち上げ、現代中国经济にいろいろな形で接觸することとなっています。その中で、日中の近代産業の発展プロセス比較というテーマで鉄鋼業をとりあげる機会がありました。そこには、上海宝山鋼鐵の設立と新日鉄の協力という事例があり、それに関連し山崎豊子の「大地の子」を読むことになりました。鉄鋼企業に勤めていた父の仕事で満州で生まれた主人公は、ソ連侵攻、満州国崩壊の中、父と離れて母、妹と満州に残され、日本への引き上げの中、母を失い、妹とは生き別れになります。そして自分は人買いに会って、中国人家族に売られ、厳しい労働生活をしながら何とか生きながらえ、その後隙を見て逃亡。運よく誠実な中国人教師に拾われ、実の子供のように大事に育てられ、大学まで進学、冶金学を学び、鉄鋼産業に就職。しかし、文化大革命等で、大学卒、日本人であることなども理由に過酷な扱いをうけます。ようやく、改革開放政策によつて、日本の協力で鉄鋼プロジェクトが進められることとなり、そのプロジェクトに参加し活躍することになります。結局、父と

は、そのプロジェクトで再会。ただ中国で育ててくれた養父への思いから自分は中国人として生きることを決意するという話。

### 人の交流

ともかく、山崎豊子の、膨大で詳細な聞き取り調査に感嘆。どんなに多くの人が、この歴史の流れに翻弄されながらも生きてきたかを改めて思い知り、私の父方の家族の満州とのかかわり、また父の中国とのかかわりを考え、今、中国東北地方を中心多くの中中国人と親しくなり、厚い交流の機会を持つていることの不思議を思わずざるを得ません。そして、何より、日本と中国との草の根の交流の重要性を考えさせられました。

私はイギリス、アメリカ、ポーランドに住んだことがあります、そこには親しい友人がいて、これらの国は私にとって特別の大切な国となっています。そして、今や中国も特別の大切な国となりました。大切な国とは、「あそこは、彼がいる、彼女がいる、どうしているかな?」という気持ちが持て、彼らを通じてその国を理解しようという気持ちが働きます。これらの時代、人の交流はさらに進み、一緒に何かを作り上げていく草の根の国際交流の機会は増え、それは世界をもっと平和にするのではないいかと期待しているのですが…。その意味で、今も一生懸命いろいろの国の人と草の根の交流を続けています。

## あとがき

一〇一五年七月開催の同期会・メール及び葉書などで同期の皆さんに投稿を呼びかけたところ、『戦時中の事はほとんど記憶にないし、父たちから戦地での話は聞いた事がない』という返事がかなりの数ありました。当初はその返事を深く受け止めもせずにいたのですが、『戦場体験者 沈黙の記録』（保坂正康著）の中で『一般兵士たちに、「おまえたちが体験したことは銃後の国民に語つてはならない」という暗黙の強要が、とくに戦友会を通じて行われていた』という記述を読み、私たちの父が戦場での体験をなにも語らないまま鬼籍に入つた理由の一端を知った思いでした。もちろん父たちが語らなかつた理由はそれだけではないと思いますが、さらに、終戦後指導者たちはGHQの戦争指導の責任追求から逃れようと一般兵士たちに緘口令をしき、「一億総懺悔」のスローガンを唱えることで「国民みんなが悪かった」と責任の所在を曖昧にしようとした。

國民一人ひとり私たちが、シッカリと事実（指導者は具合の悪い事は隠そうとするのです）を知り、一人ひとりが考えて行動することが大事だと思います。

戦後七〇年となり戦争を知らない世代が大半となつた今日、「一億総活躍」と称した戦時中の「國民総動員」にも似たキナ臭い動きがうごめいていているようですが、そんな動きを防ぐためにこの冊子が少しでも役立つことを願つて己みません。

なおこの冊子をお読みになられて抱かれた疑問・批判・感想などがございましたら、なんなりと編集委員にお寄せいただけるとありがたいと思っています。

井伊 直允

### 編集後記

○三五名ど、多くの方から原稿が寄せられました。全体のバランス上、枚数削減をお願いした場合もありました。快く応じて下さつたことに感謝します。

○原文ができるだけ尊重して編集作業を進めました。編集作業では、数字など最低限の表記の統一をしました。また、読みやすさを図るため、改行や小見出しを付け加えました。

○編集委員は、井伊直允、薄井敬、大場淑子、岡田陽一、孤崎晶雄、澤井洋紀、藤岡武義、横澤喜久子です。また、澤英明、橋爪正子、宮後康恒がサポートとして協力しました。

（澤井 洋紀）

〔編者〕

東京都立戸山高校 1962 年卒有志  
「私たちの“戦争”体験」編集委員会

編集責任者：狐崎晶雄

連絡先

Eメール sensoutaiken@yahoo.co.jp

〒 169-8691 新宿北郵便局私書箱第 2025 号城北会 S 37 編集委員会

私たちの“戦争”体験——終戦直前に生まれた世代から

2015 年 12 月 25 日 第 1 刷発行

2016 年 2 月 15 日 第 2 刷発行

編者 東京都立戸山高校 1962 年卒有志  
「私たちの“戦争”体験」編集委員会

制作 株式会社 桐書房  
〒 113-0021 東京都文京区本駒込 2-10-3  
TEL 03-5940-0682